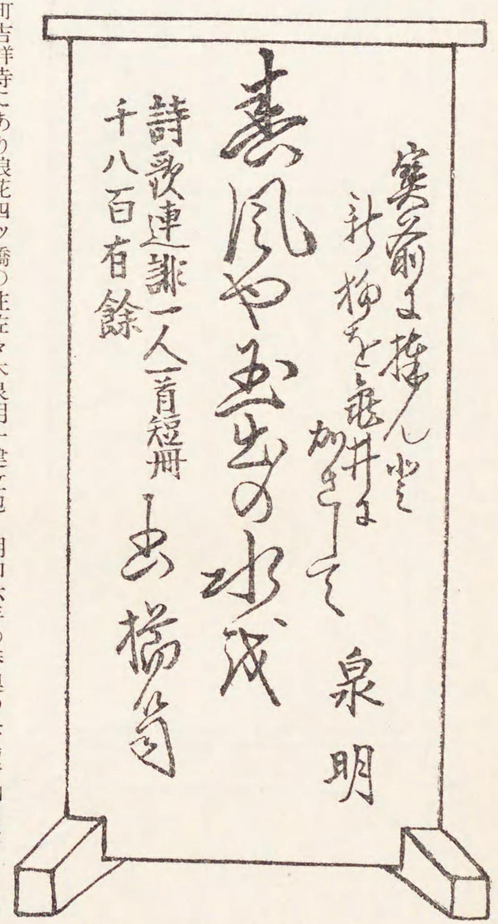
背



谷町筋天王寺町吉祥寺にあり浪花四ツ橋の住佐々木泉明一建立也　明和六年の春奥の松島行脚の序とて西上人の名所清水なかるゝ道のべの柳を一枝たづさへ歸りこの寺内にうつし植て國々より詩哥連誹一人一首の短册を乞千八百有餘集此塚に納め風雅の道ゐるべとす

碑石江嶋形　長五尺七寸五分　幅二尺七寸　厚八寸

篆額幷楷　倉鉢文平書

雲龍　法橋如興畫

千八百有餘の集は一人一首短册篇ニあり

一　御免寺社の富損失之事

石曲續談抄ニ云

京都御町奉行石河土佐守殿政道怠りなく邪正を正し給ひけれハ諸人も敬ひ歸伏(服)なしけり爰ニ去ル親王御門跡より使者を二條町奉行所へ仰越されけるは此度當寺大破ニ付修覆自力に難相成助力として富を興行致させ其德用を以て修覆致シ度間左樣に申渡さるべき旨申來りけれハ石河土佐守殿委細かしこまり奉りゐと御受申上扨右御普請の入用銀高は何程ニ而成就いたしゐ哉と相尋られゐ處使者答てされは大寺の儀にゐへは荒增大工共に積らせ見申ゐ所銀子五十貫目餘り入用ニ付右大金なれハ一兩度には出來も成がたかるべき間何卒十箇年斗り興行致シ其德分を入用ニ致度段申述る石河殿御承引あつて扨よき場所に富場を搆へ町觸ありける先ツ富の札を京都町中大小に應じ一町へ十五まい廿まい或は廿五枚と割付札一枚施入料として銀五匁宛と相定メ札數壹萬枚限り第一の富金子貳百兩第二の富金廿兩第三の富金拾五兩第四の富十兩十番の節金十兩ツゝ百番突留メ金百兩右之間々の分金貳兩ツゝ翌日合紋に合せ相渡可申段所々へ札を建町々の家持札壹枚ツゝ借屋住の者へ二軒合三軒合或は五軒七軒と身分相應に割付させ京中より札高壹萬枚代銀を富場會所へ持參致させ銀子と札の合印を引替來ル十六日富興行のよし書付出けれハ京中の者共我も〳〵と富を取らんと其日を相待居る所に其月十三日京中の町年寄ども一統に召寄られ仰渡されけるは此度堂上方より寺御修覆の助成として富興行を仰付られ則町々へ割付札を賣渡シゐへ共畢竟寺御修覆の爲に富興行の義なれハ此度の富の札は寄進に致べし右之通末々借屋の者共へ

も觸渡べしと也扨夫より御門跡へは當十六日富興行の定日ニゐへ共富突不及申札買ゐ者共へは右之通りを觸さ
せゐへは右之札代の寄銀を以て御修覆遊ざるべし猶亦來月より富興行之義相成不申當月切と申されけれハ京都
にてハ其月切ニて相止たり是甚下に益ある御さバき也とかや
評ニ云　寔に當時大坂表にても生玉北向八幡天滿西寺町神明前ニ於て毎月十六日廿一日に富興行しけるがもつ
とも所々ニ突當りたる者もあれ共來月の富の札は今月より合印を出し夫も中々一枚や二枚は邪魔なりとて貳匁
五分と定りし札を代銀五匁または壹歩ニ三まいなど、大抵の傳手にては買ざるよし噂いたしける元來此富とい
へるもの有福なる人の買事は稀なり皆々貧人多し夫故最初大原の證據の阿彌陀堂再建の爲に願ひし時曲淵殿札
料金子百匹と定られしは至つて貧しき者は壹歩の札代の工面いたし難く又金子の壹歩も餘慶ある者はたとへ當
らずとても苦しかるましきとの御賢慮ニて定められしとかや大かた貧乏人の買ものなれハ裏屋住の者隣の六兵
衞が富を取られたけなと羨ミ來月の富にはこちも壹枚入れて下されのイヤ仲間にして吳いのと有もせぬ錢の工
面なし腹からの臍くり金まで集めて買てもゝ〳〵當らざるゆへ後々には一重ある衣類までも質に入て終にはこれ
が爲に町中も衰微して爲あしき事を石河土佐守殿よく御合點にて其上宮樣の御修覆の爲にも不相成多くの山師
共の渡世の利德と成ゆへにかくは御斗らひ被成しとかやこれ偏ニむごきやうなる仕方なれ共却て町方の爲には
繁昌の基也と心ある人は感じけると也
され共何方も欲の世界今は天滿にて相國寺の富始り長町貳丁目に札場を建その繁昌大方ならず買人の山をなし
終には此店を打崩しける程の人輩集也爰ニ近年身上不如意にして手廻ミ惡く難澁なしけるもの此體を見物し誠

に富も當れハこそ買人もあれ我も貳匁五分にて百兩取なバ又一ト元手と思ひ傳手を求めて銀五匁にて札を買ま
た思ふやう壹萬人の内には定めて高運の人あつてその者に當るべし発角神佛の加護なくてハ叶ふまじとて日頃
信仰なす稻荷大明神へ一七日ケ間は參籠して祈りけれハ末世とはいひながら七日の滿ずる曉稻荷の社壇のうち
より妙なる御聲にて善哉〳〵汝が信心深きを感じ納受せしとの御告うれしく三度禮拜して立歸り扨十六日に成
しかバ早朝より天滿へ立越今や突かと相待けるうち程なく役人立會て突キ上る第一の富うれしや今ぞと合紋を
引合し見るに番付大きなる違ひゆへ大きに驚き此筈ではないがふかし第二の富ならんと思ふうち此番にも當ら
ず第三第四と終に百番の突當まで節々は扨置間々にさへ當らず此男夫より立腹して賴ミ甲斐なき稻荷とは思へ
どもせん方なく立歸りて其夜はましくしと寐られもセず居ける所に夢共なく現共なく白髮の老人稻を荷ふて來
り給ふを見て扨は聞及ひし稻荷明神とは是ならんと思ひ彼男申けるハ富の札の突當らざるは多人數の事なれハ
是非なけれ共何ゆへ某を欺り納受せしとは告給ひしぞや今時は神樣も空言を宣ひても苦しからずやとの利屈詰
に明神も氣の毒顏にてされハ其いひ譯に來りし也我も汝に受合し事なれハ十五日の晚より彼場所へ至り汝が番
付の札をハ上へ直しやらんまと先ツ箱に入らんと思ひて內を差のぞきゝれハ天照皇太神宮を初め奉日住吉また
は金毘羅などの諸神諸佛が上を下へと返し給へハ中々我等ごときの老神は小口迄も行事叶ハずご〳〵歸りて
汝にも面目なしと詫言をのたまひけるとなん

一　拾子之事

同書に云　明和六丑年の暮近年打續き米穀高直成ゆへ三ケ津は不及申在々處々迄も困窮にて一向中分より以下

は難澁なしける故にや毎日〳〵町々より捨子有之由を申上けれハ曲淵殿聞召此頃は殊の外なる捨子の訴へに出けるが定めて物入多く有らんと御尋ニ付町人共申上けるは町内より養子に遣シゟへは五兩七兩ッゝも付不申しては貰ひ人無之よし甲斐守との聞召夫は大きなる物入也畢竟親に見捨らるゝ程の果報つたなき小兒なれハ末々成人致しても立身出世は仕間敷間以後は捨子あらバ錢壹貫文ッゝ相添て乞食へ遣ハすべし必ズ訴出るに不及と右之趣町々へ觸させられける

評に云　これもつともの御政道也家柄を見かけてよろしき所へも養子にやられふかと思ひて捨る親も多く有べし捨ると乞食に成るといふ事をハ知りながら捨る親は十人の内に壹人か貳人なるべし左すれハ自然と捨子も少く相成る道理也とて人々感心致しけり

一　今年中　角の芝居にてあやつり興行

一　同　筑後芝居竹本豐竹打込之一座ニ而興行

一　五月　難波新地ニ而曲馬大當り

當春天王寺開帳之節も大當りせし番付は奥ニ出ス

一　當夏　坂町裏ニ而晴天十五日の閉諸國より盲人幷ニ女をあつめ相撲取合幷土俵入の體をなす

西之方盲人　大坂　出水山　お喜代

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

さつま　大霞瀧十郎　大坂　大嶽おくミ

九州　一目嶋左膳　同　渡舟おせん

兵庫　月不見山常勝　サカイ　礒岩おしな

大さか　袖之浦久多　大和　繁ケ松おつな

同　一津尾絲七　南都　横霞小巻

九州　悟り山常品　かわち　瀧之音おきし

口行司　浪花吉五郎

上行司　岩村千之助

東之方盲人

奥州　無向嶋喜代鶴　京　洞ケ谷おくり

京　探り山龜右衞門　江州　大灘おなミ

南部　兩隱友五郎　大津　太り獅子おはな

越後　片目嶋他吉　京　床之海小いと

サカイ　鈴の音喜六　同　玉蔦おつる

河内　杖ノ里林八　同　大嵐おさん

伏見　大町小てう

一　同年　難波新地曲馬の前にて諸方より盲人數多寄合おどけ角低(ママ)幷輕業興行是も大繁昌ス

東ノ方

江州　逢坂山關右衞門
江戸　白玉蠣右衞門
同　鈴ノ音杖之介
京　八曲藝太夫
同　鷲抓力之介
同　轆轤山引右衞門
丹州　丸木橋越五郎
加州　逆睫紅右衞門
同　姫松岸五郎
いつミ　熱湯崎臭之介

行司　入殘差之丞
奈良村　圓集之介

京　杖さぐり明藏
江州　辻風陸之介
同　豕ヶ崎惣十郎

西ノ方

九州　日向嶌七兵衞
江州　琵琶湖三井右衞門
同　内障山常右衞門
大坂　不知闇黑右衞門
尼崎　糺川涼五郎
九州　垣覗不見藏
同　長者ヶ崎常右衞門
尾州　春霞野邊之介
大坂　大鳴子綱右衞門
同　西國順藏

行司　丸金荒井之介
紅粉屋川天滿兵衞

兵庫　靱負山藤之介
明石　槇波縫右衞門
同　昆陽ヶ池鮒之介

江州　捻銀指之介
京　鳥目山暮次郎
同　手引山三味市
河州　さぐり山琴平

頭取　中村平九郎

一當冬　道頓堀樋ノ上松永忠藏といふ賣藥店ニ飼置たる熊の子主シ忠藏を喰殺ス
翌年中之芝居中山座の二の替りけいせい咬閙吧文字（さのがたるもじ）といふ新狂言に取組坂東岩五郎つとむ　根本藏ス

大坂　老母川負右衞門
同　數にらみ笹之介
同　星隱シ玉次郎
同　たゞれ目痛次郎

頭取　近藤七艮平

一曲馬名人　橘三輪九死
一七月　醬油屋心中

右心中中の芝居三升座ニ而一夜付ケ狂言廿一日より　二楠蓮紋日

大木新藏

明和七 庚寅

一

一 三月三日より 勝尾寺二階堂靈寶 京太秦廣隆寺にて五十日閉開長

一 同 日より あみだ池ニ而江戸鳥輪常光寺開長 六十日開

一 三月九日 勝尾寺一山不殘焼失

一 同 日より 上中島小松專念寺四萬七千日回向 十五日迄

一 同 廿日より 谷町欣淨寺寶物弘通

一 四月一日より 天滿大鏡寺ニ而越後高田善導寺開長 六十日開

一 同 日より 同智源寺開山百五十回法事 七日開 八日より開長 晦日迄

一 同 二日より 小橋金慶院常念佛開闢 八日迄

一 五月 旱魃水施行

夏至の時分より八月上旬迄雨ふらず旱魃ス全體當年中大ひに日でりなし京洛中も水かれて川原ニ井を堀り別而上京ハ水なし京大坂共一統ニ用水を出ス大坂は川口邊汐さして川水不呑ゆへ舟にて施行水を運ぶ江戸近在も旱魃して大根一本卅五文より五十文程に賣ル其外諸國一統ニひやけ也

一 七月廿八日夜戌之刻より子之刻迄北の方に赤氣あらゝれ大火のごとし初は子の方專ら赤ク亥の五刻斗り專ら廣ク成り寅の方と戌の方ニひろがる赤氣の內ニ白き筋光明のごとく子の刻ニ大半止ム白キ筋太ク見え又細クみゆる事度々に及ぶ

俳諧新選云

明和庚寅 年夏より旱して川々も井の水も悉く涸果しかハ世上の騒大方ならさりしに文月末の八日の夜北方に夥しき赤氣たちて人顔さたかなる斗輝しかハ誰も〳〵未曾有の事よと驚恐しに葉月五日大雨盆を傾るごとく其曉又夥しう降しかハ空のけしきも引かへて俄に涼しく成にけりされハ井も川も本にかへりてもろ〳〵怪き說の巷に滿ぬるも自ら止ぬ

嘯 山

結構な雨や野山も錦着ん

一 六月十二日 北埜西念寺住持の事

世俗十四ハツチリと云

法名 賢空灌哲上人

一 十二月八日 道頓堀火

攝陽奇觀 卷之三十三

〔編者曰ク原本此ノ所十一行空白〕

道頓堀南側出羽芝居の邊より出火太左衞門橋筋法善寺前迄燒東は豐竹芝居隣り迄やける

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　當春　中之芝居中山與三郎座二の替り新狂言

けいせい咬嚠吧戀文（じやがたらふミ）

右之外題　公より御差留被仰付文字相改

けいせい咬嚠吧文字

咬嚠吧ぶミの外題御差留之趣意は先年寛永十三丙子之年かとよ蠻人の子孫長崎に在しを　公より吟味ありて二百八十七人阿媽港（アマカハ）に遠流せらる血脈父を本として母にはかまひなしたとへハ母日本の種子にて父蠻人の血脈なれハ勿論也父日本にて母蠻人の血脈なれハ則母のミ遣して子は留む或は父放されて子ハ留り或は子放たれて母とゞまり母放されて子留る兄行て弟留り弟行て兄止まる夫妻相分れ姉妹相離るゝ有樣町々戸々の悲しミいかなるむくつけきあら夷も袖ぢぼらぬはなかりし假初の旅路の別れをだに石と成し歎きもあるに今をかぎりの別路夜もすがら手を取かハし顏をさしあてゝ物もいひあへずまして船に引乘らるゝきハゝ夢か現か我か人かとそゞろごと聞えて中々絶も果なんとするもあれど命だにあらバ又　公のゆるし有んも定めなき世を賴ミてよと人々のいさむるに又たどる心地にて船底に伏沈て折から風だにつれなき追手にて嶋かくれ行しこそあハれなれ　又寛永十六年己卯の事にや紅毛國も蠻國に類ひせし水土なれハその種子日本の種子に混雜すべからずとて則平戸

長崎に在し紅毛血脈の輩十一人咬嚠吧へ放流せらる（長崎より三千四百里）此時よりジヤガタラへも紅毛人住居ありて平戸へ年毎に船つかハしぬ此故に紅毛の子孫ミなジヤガタラへ遠流也此十一人も皆長崎より歸帆の紅毛船に乘て放チ遣ハさる是は蠻人の種子とは違ひ紅毛船は日本へ停止にもあらねハ年毎に來れる紅毛船又は唐船も往來あるゆへに故鄕のぢたしきほど或は友だちなどへ文つかハし送り物など品々ありし其中に長崎何れの町の女人（はる女）父は紅毛人にて母方のよしミあるが本に養ハれ居たるに此年十四歳なるを咬嚠吧へ流されたり此女顏かたちいとうるハしく手習ひ常に艸帋など習ひてさかしき心ばへなりしがかゝる所に放たれツヽ何のゆかりもなき程にて明暮故鄕へ歸らんことを神に佛に祈りツヽ年月を送りしがかくてひとりあり果ぬべき便なければ命の露のよるべ求めて唐土人の妻と成て子なとありて日本へ度々文おこせたり元祿九年の頃迄ながらへ七十六七歳にて死せしよしたよりに聞え侍りぬ其後子なるが文おこせしかど　公より止させ給ひて後はいかゞ成行けんぢらず

ぢやがたら文長文なれバ爰ニ略ス管見日記に載ス

外題の文字差構ひ之義被仰付ハ事度々有り

寶曆四戌年　豐竹座　將軍太郎東文談（ヒヒ）　改　相馬太郎莩文談

同　七丑年　同　座　祇園祭禮信長記（ヒ）　改　祇園祭禮信仰記

安永六年　中の芝居　けいせい周防壇（ヒヒ）　改　けいせい素袍壇

一　二月　角の芝居二の替り新狂言東山殿女狩

大切ニガンドウといふ大道具を初ム狂言作者竝木正三の工夫也ガントウの圖は安永二年正三の條を見るべし此

大道具小兒の翫ひもの箱天神の仕掛に似たるゆへ箱天神共いふ秋葉權現廻船噺大切にも用ひたり

一　五月　竹田新松座あやつり

近江源氏　太平頭鎧飾　五月廿二日初日

六月十六日差留メ被仰付ゐ夫故正本不出　後年　鎌倉三代記といふ古淨瑠璃の外題を用ひ今に翫ふ都而此世界は差構有之南蠻鐵後藤目貫を義經腰越狀とする類ひ多し

一　當夏　角の芝居夏かほみせ興行

藤松山十郎座

蚊（てんが）追（すみよしおどりおどりのはじまり）茶屋の催馬樂踊始

店敵討

壬六月十二日より常の通りに相始め式參夏衣裝にて座付を勤メ大切天下茶屋の場にて座中不殘風流大おどり場のうへに大團を釣りて見物をあをぐ仕かけ此一興も並木正三の趣向也

一　當冬　藤石連中始ル

浪華藤村何某といふ板木屋と石村何某といふ三味線屋はじむ夫故名字の頭字を取りて藤石と呼ふ後年寛政中に絶たり

一　十一月十五日より　吉田文三郎江戸登り故人冠子十三廻忌追善を勤ム出遣ひ所作事

明和八　辛卯

一

一　正月九日　長堀火

白髪橋北詰東西兩側白髪町迄やける

一　同　十三日　佐野屋橋北詰西角より半町餘燒ル

一　同　十七日　堂島綠橋南詰半丁餘燒ル

一　二月七日より　中寺町大雲寺開長　三月廿七日迄

幷近江古半子所持之名石品々拜見四月二日より八日迄一萬日廻向

一　三月三日より　濱の墓源光寺ニ而勝尾寺開長　五十日ノ間幷源光寺靈寶も拜見

一　同　日より　北野大融寺ニ而讃州善通寺開長　六十日ノ間

一　同　日より　天滿法界寺開長　五十日間

一　同　五日より　河内佐太來迎寺開長　卅日ノ間

一　同　十五日より　北野不動寺ニ而京北野宮仕中自右古所持之天神觀音開長　卅日ノ間

一　同　日より　北野自香寺ニ而京六齋大念佛千葉寺光福寺開長　五十日ノ間

一　三月　谷町欣淨寺ニ而尾州圓福寺親鸞上人名殘之木像弘通

一　五月　疫病流行

爲疫死　千日に大石塔建

一　四月　伊勢御影參り

今年伊勢御影參りとて諸國より老若男女五六歳以上の小兒迄も參宮致ス事夥シ其初めは丹後田邊へんより三月頃專ら參り初ゆよし其後丹波山城京近邊伏見專らにして京へうつり四月十五六日頃京より夥しく參詣輩集して何十萬といふ限りを知らず三條五條粟田口山科邊へ鳥目握り飯餅笠帋扇草鞋等思ひ〳〵に持出て施ス同月廿五六日頃より大坂も段々輩集して京都よりも又夥しく廿八九日より五月節句後迄は安堂寺町筋玉造口ハ東より西へ往來の通路成がたく落せしもの二度拾ひ上ル事あたハず施行物も京より增りて町々より毎日くらがり峠奈良迄も持參して送り施ス四月廿九日頃は別して夥しく輩集し奈良あたりより宿なく歸り來ル者も多し女小兒は峠を施行駕籠ニ而越させ道中筋ハ何方ニ而も無錢にて宿せし所もあり大坂への下向には大津伏見大坂八軒屋ニ而も白かゆを施し髮月代をして湯風呂へ入レ淀川下り舟を施行し思ひ〳〵に施すといへ共廣大の輩集なれバ道中筋食物切れて焚出ス事出來がたく渴命ニ及ぶ者も多しまして施行を心當にして路銀の貯もなく出しものは難義致シ命を落すもの是亦夥しき事也輩集も少々減る時分には施シも次第ニ相止ミ別して難義する者多シ田舍遠國にては大坂にて夥敷施し有之樣子を聞傳へて中國九州四國より追々に參詣シ凡八月迄參詣相續キ是又大ひに難義に及ぶ且四月より六月迄京大坂近國とも劍先御祓御幣其外種々の物降りしといひ觸せしかど六月中旬ニ至り

て御公儀樣より御吟味之御觸等有之其後は降り止ム京近國東國筋よりも參詣せし事京大坂に同じ四月下旬南都の人彼地に泊りし人數の日記也とて十九日の間を記せしものあり

伊勢參宮奈良泊人數書

卯四月廿六日	千百三十人	
同　廿七日	四千二百廿人	
同　廿八日	壹萬三千七百五十人	
同　廿九日	九萬七千三百廿人	
同　晦日	七萬九千三十人	
五月　一日	十一萬三千六百人	
五月　二日	九萬二千八人	
同　三日	十二萬五千人	
同　四日	三萬五千七百五十人	
同　五日	十八萬三千四百卅人	
同　六日	十六萬四百十人	
同　七日	十八萬四千百六十人	
同　八日	十萬六十人	
同　九日	九萬三千人	
同　十日	八萬九千五十人	
同　十一日	八萬六千九十人	
同　十二日	三萬九千百人	
同　十三日	九萬千十人	
同　十四日	八千六百十人	

右十九日之間〆百五十八萬八千七百五十人

此人數壹人前一日米五合宛にして　高　七千九百四十三石七斗九升

右之米七拾匁かへにして　代銀　五百五十六貫六十二匁五分

又壹人前小遣ひ一日に五分にして　高　七百九十四貫三百七十五匁

同　木賃三分にして　高　四百十六貫六百廿五匁

三口〆一日之入用　高　千八百廿七貫六十貳匁五分

八日之道中積りにて　惣銀高　壹萬四千六百十六貫五百目

一五月四日　口上ニ而申渡覺

此節拔參り與唱へ老若男女ニ限らず借屋を明ケ斷もなく罷出或は極老幼少之者を殘し置ゐも有之趣に相聞ゐ之閒畢竟信心ニ而參詣致シゐ事ニゐ得は指留之筋には無之ゐへ共町家人少ニ相成自然と火之元其外不用心にも如何ゐ閒參詣之者は主人家主へ相斷可罷越ゐ無斷罷出ゐ者參詣決而致閒敷ゐ若シ無斷出ゐハゞ何れにも缺落斷は可申出事ニゐ段其義無之段心得違之事ニゐ條無斷罷出ゐ者有之は定例之通相心得可訴出ゐ右に付種々奇特有之由ニ而異形等を申觸町々騷ゐ由相聞え如何之事や自然右體之義取拵申觸ゐもの有之其段相顯ゐハヽ急度可令沙汰ゐ以上

卯五月四日

勢多唐巴詩　下向口號

往來纔七日長吉昨夜歸旦那笑不叱奥樣問是非脚半紐漸解艸鞋足少傷道中無食物困窮不可忘蚊多木賃晩蠅羣晝飯時叩口腹減早揭尻足步遲錢盡無土產歸來暫慇勤御祓纔一枚熨皺奉主君

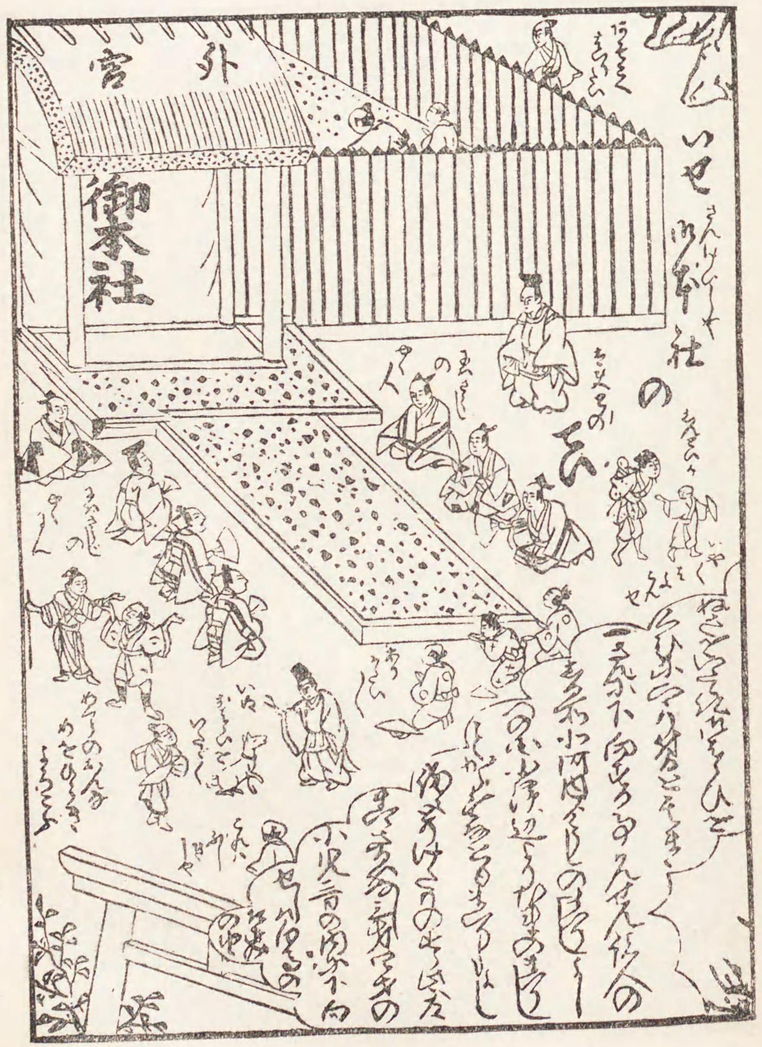
町內書懷

近來町內騷缺落參宮多參宮吾無構唯恐有小過會所催寄合相談從早朝仰山五人組宿老慘不驕試問各家內共無何事不近頃止商買臨風氣坐浮昨夜丁稚拔今朝追手迎不時傭人走物入殊平生又言一昨夜拙者失女房能寐夢不識娘亦追跡行從來參宮志書置兩人同見之少安堵君察吾胸中遙憶道中筋只是親子會若不梯大工定知作鮒鱠皆謂此町內空家悉向東試籌人別帳參者九分通

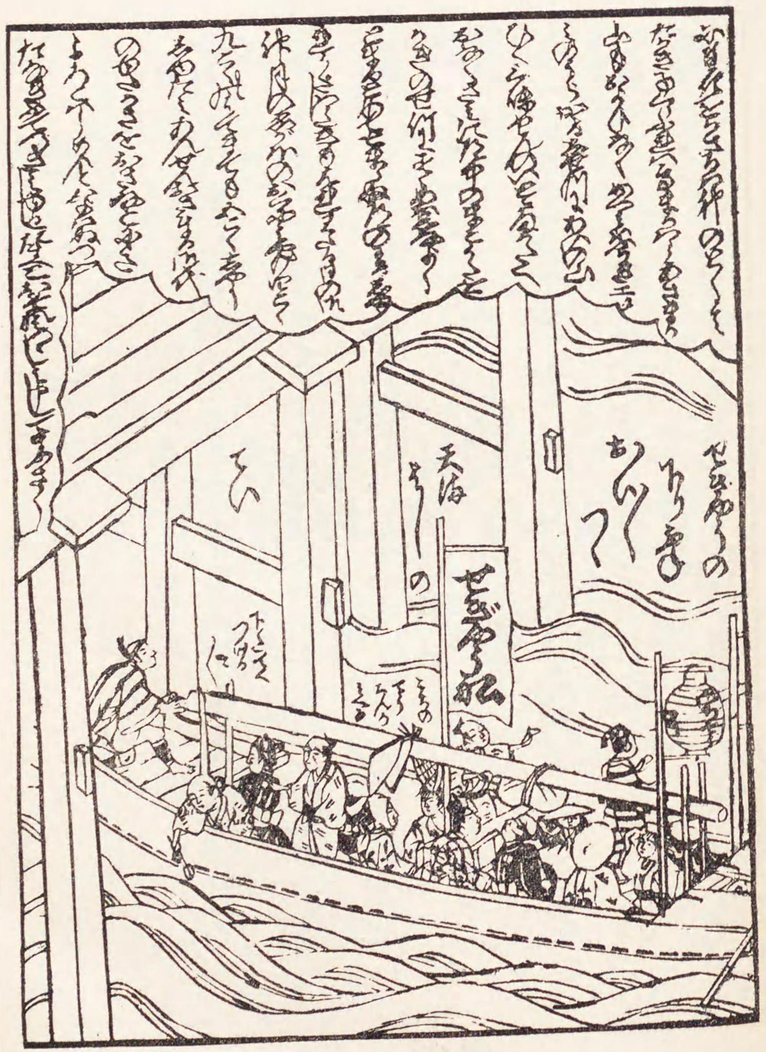
施行

紙緡繫五文出張構三條牀几道者駐毛氈施主驕必莫愁錢少施行在幾居贅言纔一刻頓費十貫餘

聞書伊勢壇全


外宮
御本社

三四



三五

拔参御影百人一首

天智天皇

麥秋の刈穂をすて、はしりゆく御影参りハ汗にぬれつゝ

持統天皇

春すぎて夏日にてられぬけ参り子共おふてふ尼やかゝまで

柿本人麿

親の手をつるにはなれぬおさな子もおかげ参りにひとりかもねん

山邊赤人

伊勢路へとぬけ出てミれは白妙の餅の施行や銭ハふりつゝ

猿丸太夫

おくさまハもミぢぶくろもなくおかもゆさへつかハぬ旅ぞわびしき

中納言家持

笠買うてわたす娘のおもざしのおろきをミればついて行たい

安陪仲麿

劍はらいふりさけ見れば春日なる奈良をとまりと出て行かも

喜撰法師

われいちとにわかの旅に日數へてよふぬけたりと人はいふ也

小野小町

蚤虱(のみじらみ)うつりにけりなきのまゝにおかけ參りとざこねせしまに

蟬丸

これやこの鄙(ひな)も都もほどこせど施行のかずハおふさかの關

參議篁

おさな子もわらんすがけて參りしと親にもつけよ下向(げかう)する人

僧正遍昭

天津風雲のかよひぢ吹とぢよふるおはらいをバしとゞめん

陽成院

おはらいの空(そら)よりおつる御利生の數ぞつもりて伊勢へ布引(ぬのひき)

河原左大臣

道法(みちのり)もふらず二日や三日にて下向する子ハ我ならなくに

光孝天皇

人のため門口に出て茶をぞ汲む我が擬待(ぎたい)に施主(せしゅ)ハ付つゝ

中納言行平

子共とてあんじ給ふな親々がまつとしきかバつい歸りこん

在原業平朝臣

ちはやふる紙の幟(のぼり)を立田川からくれなゐの合おるしおて

藤原敏行朝臣

皆神(みな)のうけによるからよるさへや狐たぬきも人をよくらん

伊勢

おうけあればみじかき夏のよるも目のあハで此たび拔出(ぬけ)よとや

元良親王

はぐれても參るハ同しいせの道どこぞのほどであハんとぞ思ふ

素性法師

今こんといひしばかりに長々と有たけの連を待出るかな

文屋康秀

惡口(わるくち)をいへば其まゝふやちこばるむべ此たひハあらしといふらん

大江千里

いとぶくのかゝるものこそかなしけれこんどのやうな事もあらねど

菅

此たびハ何もとりあへず抜參り前だれがけをふたるまに〳〵

三條右大臣

名にしおハゝ大かたならぬ施行をバ下かう道までやるよしも哉

貞信公

おくり來る人も御影の心あらバ今より參れつれとならなん

中納言兼輔

御影からわきて參りもおほいつゝいつゝのみきのふしぎ成らむ

源宗于朝臣

百性の内に客こそまさりけるやど屋もたゞハかれぬと思へハ

凡河内躬恒

心あてにやとふ錢もちぬけ參り節季まとハし事をかゝせる

壬生忠岑

親かたのつれなく見へしふハり繩でつちハぬけてのこるおはらい

坂上是則

天照らす神の使と見るまでにこゝやかしこにふれるおはらい

春

道列樹

道すぢをてらしかけたるてうちんのながれもあへぬもミち成けり

紀友則

節季をバふづ心なくぬけれども親かた達のふかりのとけき

藤原輿風

誰もかも知る人でない施行場にまつや參りを友の心で

紀貫之

人ハいざかくとも知らず旅籠屋のとまり〳〵の蚊にこまりけり

清原深養父

ぬけし子の親ハ宵からあくるまでけふハいつくに宿やとるらむ

文屋朝康

ミな杖に笠のふるしの國所書どもとめずにせぞ知れけれ

右近

ふからるゝ身をハ思ハす抜參る人の心のきどくなるかな

參議等

御影にて旅をふのけるはした錢あまりてなどかゝやけをぞかふ

平　兼盛

ふのぶれとやりに出にけり此たびハほつきしたかと人のとふ迄

壬　生　忠見

ぬけ參り伊達こきの名ハ立にけり人ふれずこそゆかた染しか

清　原　元輔

御きどくの施主と袖をふほりけり此夏旅をたすけこすには

中　納　言　敦忠

あひ見ての今の心にくらぶれハむかしにまさる御影なりけり

中　納　言　朝忠

あふことのたえてしなくハ今の氣で前の御影ハ陸にならまし

謙　德　公

哀ともいふべきものも多き中に身をいたつらなしぬるもあり

曾　根　好忠

馬の背にねむる旅人いづくへと行衞もふらぬいせの道哉

惠　慶　法師

麥わらを取込ころハさびしきにことしハ人に秋がきにけり

源　重之

錢をおしミかたいぢものゝふわんほもくだけて物を人にこそやれ

大　中　臣　能宣　朝臣

ま、子もり黑米飯の喰たらで腹ハへりつゝ物をこそおもへ

藤　原　義孝

時節がらおしからざりし命さへながくもかなと思ふ世なをり

藤　原　實方　朝臣

かあい子に思ハす旅をさしもぐささしたおかげが灸よりもきけ

藤　原　道信　朝臣

ほどこしハ受る物ぞと聞ながらちとはづかしき初乞食かな

右　大　將　道綱　母

野宿した草の枕のあくる間ハいかに不自由な物とかハしる

儀　同　三　司　母

入ふつゝまたてることもかたければけふをかぎりに抜參せん

大　納　言　公任

六そじあまりなゝのむかしに成ぬれど名社流れて又はやりけれ

和泉式部

あらさらむ路銀の外の氣遣ひに追人かけしかあふよしも哉

紫式部

めぐりあひて見しや夫ともわかぬ連またはくれにし夜半の旅かな

大貳三位

まいらんかいなやと伊勢の風ふけば出そよ人にさそハれぞする

赤染衞門

やすらハす寐もせず道を夜通しにあるくハ月の御影參りか

小式部内侍

伊勢路までゆく道法の遠いのにまだふミも見ぬ子迄參つた

伊勢大輔

いにしへの御影で抜た婆々さまにこんなものかとたづねける哉

清少納言

御影にてぬけたと宿屋はかるともよも大坂のものハゆるさし

左京太夫道雅

今ハたゞ家内參つたとバかりを宿がへならでさす時節かな

權中納言定頼

始りハ宇治から八幡たん〳〵にあらハれわたる伊勢の御利生

相模

施しをなさぬ袖だにくるしきに盜んだはちの名こそ惜けれ

前大僧正行尊

路銀をもたではだかのぬけ參り腹より外にへる物ハなし

周防内侍

いたづらハ夢バかりでも手枕に不義してぬけぬ名社はづかし

三條院

心にもあらで下人を參らせとよろしかるべき家の御祈禱

能因法師

施しをうくれど參りで嵐ふく陦の皮なる乞食成けり

良選法師

さびしさハこちばかりかと尋ぬれバいづくも同し參宮のるす

大納言經信

夕ざれば宿やつまりて道づれのあしのまめまでふミつぶしけり

なミならぬ施行ハすれどミな恩にきせぬに袖のぬれも社すれ　祐子内親王紀伊

高札てとなりハ施行出しにけり此町からもたてずハあらなむ　前中納言匡房

ぬかりける人も御影でいせ参りはげしかれとは祈らでもよし　源俊頼朝臣

飼置しあるじもちらぬふしぎにてことしハいせへ参る犬あり　藤原基俊

はたごやで氣を付て見れハ立まじり参りのものにまがふ白浪　法性寺入道前關白太政大臣

足よわのつれにせかるゝ同行のわれてもすへに逢んとぞ思　崇徳院

子をつれて参つた嚊に夏の夜もいくよ寐覺ぬるすのてゝ親　源兼昌

神風にのほせるいかもたへにけりぬけ出るいせの御影さやけき　左京太夫顯輔

いつかたのものともちらす黒髪のみたれてあるハゆふて参らす　待賢門院堀河

ほとゝきす鳴つるかたをながむれハたゞくらがりの御影参りぞ　後徳大寺左大臣

ふしぎやな拠も時節ハ有ものかかねが降のも御影成けり　道因法師

世の中に鬼こそなけれ御影なら山家のおくもたゞとめてやる　皇太后宮太夫俊成

ながらへば又有へきや牛までがひとりまいるとふれるおふしぎ　藤原清輔朝臣

おんほまで参る時節ハ死やらで火屋の隙さへふしぎなりけり　俊恵法師

走れとて誰かハ道をいそがする缺落顔なるぬけ参かな　西行法師

ちらむしの露もまだひぬ竹の皮にゆけ立のほる又にぎりめし　寂蓮法師

難波江のあしかる〳〵とひとへもの身を清めてやぬけ參るべき　皇嘉門院別當

ぬけ參りたへなばたへね長ければやどやもこんがよいりもぞする　式子内親王

見せばやな日和つゞきに下向して燒にそやけし色はまつくろ　殷富門院大輔

乳のミ子のなくや宿屋の入込にたれともふらすおされてぞねん　後京極攝政前太政大臣

一さんに參つて來たかおさな子ハ人こそふらね白馬にのり　二條院讃岐

淀川につねにもがもな伊勢參りほどこし船のたゞでのせるか　鎌倉右大臣

仕事しの山の神までぬけ參りせんだく物をうつ家もなし　參議雅經

ひとへものわか寐たうへにおゝふ哉つりてハあれとすゝやぶれがや　前大僧正慈圓

花さそふあらしの庭の雪ならで降行ものハ伊勢の御はらい　入道前太政大臣

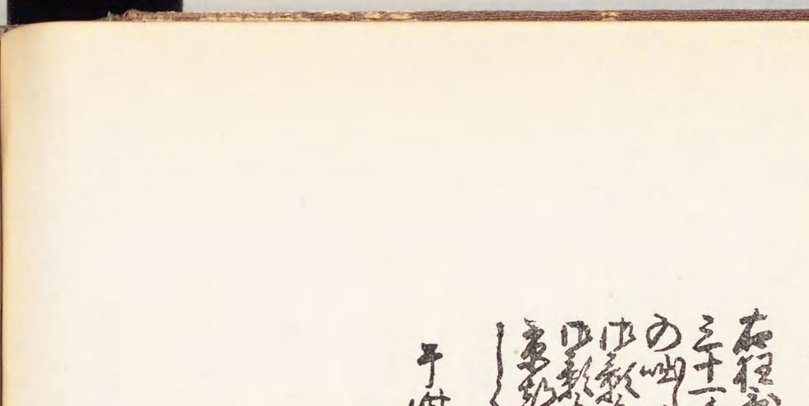
來ぬつれをまちつたづねつせわバかりやくや子共に氣ハもまれつゝ　權中納言定家

風そよく奈良の宿やの夕ぐれはのほりぞ連の印成けり　正三位家隆

人もよし我もうれしおゝけなくほどこす故にむくひうる身ハ　後鳥羽院

百敷やふるきにかへるいせ參り猶餘ある德の大君　順德院

以上　百首



おかげまんざい

伊勢の神御たくせんに御代も榮へます御利生有ける寳永の年立かへる賑ひにぎゝも若やきばゝのふわさへのひけるハ誠にめでたうさむらひける京の司はくハんばくとのおりゐの帝ハ日の本たいり皇ハ御譲位神は託宣萬やす〳〵とひらやすのミやこにて卯月廿八日御即位ましますわか日のもとの神といはゝれ給ひて商ひはんじやう守らせ給ふまことにめでたうさむらひける御利生〳〵日本國の御利生ふつたる物は何々おはらひ小まかねごへい雛かたたハら白米玉に燈明白羽の矢施行〳〵〳〵〳〵かごめせのとやつたるものハ施行そこを打すきこなたを見たれハぎん錢にぎり飯にしめちりめんざこ美淋酒がす梅干はつたい茶かゆ白かゆ丸藥さんやくせつたいむかひ舟色々けつかうに飾りたてほどこせしをまち〳〵の小娘小どしのよりしうバたちまでおかげ參りの有さまけにもおさまる御代也時なり萬民のミくらにずつしり〳〵寳も納る門には御影參り脊戸にはぬけ參りそつちもこつちも幾ねんの御利生とみよはさかへて

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

ぬかりの月

ぬけてミてもどりしむかしはづかしやかハひ男にふかられて節季よりつらひよのならひ思ハぬめしにせきとめられて今は野山もひとりたびすまぬ心の中にもふバしすますぬかりの月のおかけ忍ひてぬけた我内もひろい世界の伊勢まいりせまふおもひしまことゝまことこんなおかげが唐にもあろかはじめの時にぬけたらバあめがふ

たにも名やたゝん

おかげざる

扨も目出たの伊勢まいりめてたの〳〵ぬけまいりこがねますにて粟はかるかゝがはしれハとゝはしる角のないこそそいよけれ〳〵施行もどりハおもしろや〳〵よさのとまりハどこがとまりぞ奈良かゝミづか三輪かはつせか三輪がとまりじや杉のはごしにおかげをミれハはごしに〳〵ぬけたをミれハちばしとどめてまた施行ゑやくをふるのハおもしろやいとしとのごがミゆるやう犬がぬけそろ四ツ辻に〳〵御影参りとぬけまいりいくよとめてもとめあかぬ〳〵おいせ参りは面白や

浪華　白縁齋梅好述

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

因云　伊勢太神宮に參詣に限り抜參りといへるは外宮ハ豐受太神宮にてましませバ參宮といひて苦しからず然れ共内宮ハ宗廟たれバ猥りに參宮する事禁ぜらる畢竟外宮へ參宮の序にぬけて參るゆへ也といへり主人父母の前を抜て參るにあらず全ク官府を恐れゝ奉り抜て參る故に斯はいひ來れりと心得べし

〔編者曰ク原本此ノ所四行空白〕

一　六月十一日より　大坂御停止　七日ノ間

去五月廿四日　徳川中納言殿御逝去

一　七月九日　大坂御定番丹羽式部少輔殿御死去ニ付二日之開穩便

一　同　廿二日　京大坂近國大風雨

廿三日大高水淀大橋落ル伊賀伊勢も大高水鈴鹿山坂の下邊大ひに損ズ

一　八月十七日　新町火

夜九ツ時より新町出火九軒丁不殘西南へ小濱町迄燒抜凡二丁四方ほど燒ル

一　同　廿七日より　大坂御停止　九月廿三日御免

去廿日　將軍樣御臺所御薨去

一　九月五日　西横堀火

夜九ツ時西よこほり東側瓦町より備後町迄壹丁餘やける

一　同　廿二日夜九ツ時過　北濱一丁目廿間口ほど燒ル

一　十月十七日　兵庫火

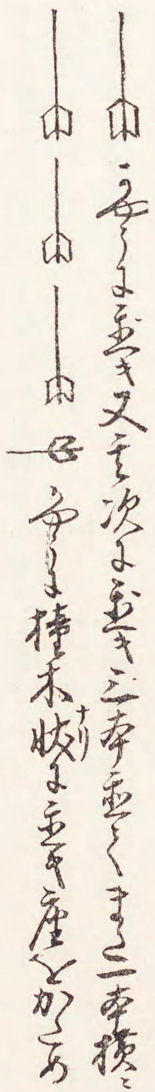
一　今年　堂島米相場七三年とて大凶年のよし

一　同年　道頓堀ニ而玄水といふ盲八八人藝初ム

明和年閒

一　大坂市中に投壺會流行

明和初めの頃より安永に至りて投壺の會流行す此遊びは原(モト)江南先生より世上に行ハる本式は唐服なりしが略して和服を用ひ大紋を着ス會席に臨んで投壺するには毛氈を敷其中央に候板(コウハン)をしき其上に壺を置き矢筩(シトウ)に矢たヤて也籌一手ツヽ入氈の端と壺との正中に青龍の籌は東白虎の籌は西におく東西に中局計局ありて矢算を執るべし戯者(ウチテ)出座して氈より二尺手前にて一禮し進て毛氈の際まで出兩手にて矢筩を取兩手にて矢を拔左の手に握り左の膝の上に竪に持右の手にて左の握居る矢を一本取壺の底の所へ



矢を一本ツヽ取揚兩方一禮して西より投出すべし左の肩と右の肩と一整(ソウ)に齊(ソロ)ひ身の動かぬやうにすべし手を伸し尻を持あげ肩を出す事有べからず矢壺の上五寸位にて正直に立て入るにてなければ眞の中にあらず矢の立やうに心掛べし十二箭投終り記錄に載算數にて賢劣(カテマケ)を定て又投べし勝の事は賢負の事は不勝持の事は鈞(キン)一番を一壺又一競一相手は一耦一壺は短競三壺ハ長競負逃は更代なといふ種々の名目あり負たる人は罰杯一壺に一杯も

ありまた一算に一盃十算に一盃もあり賢者は慶爵(ケイシヤク)いはひのさけ三番勝二獻肴あり負たる人は綽興(シヤクキヤウ)とて酒を飲ずハ謠にても肴とすべしとぞ猶委しくは投壺指南投壺小筌其餘投壺の國字解を見るべし近世流行せし投扇の遊びも投壺の戯れに彷彿たり

一　女髮ゆひノ事

院本敵討未刻太鼓　享保十二年未正月　下の卷になんぼ大坂じやといふて姫ごぜの髮ゆひと男のとりあげばゝはこさんせぬと書たりしは享保の末なるにはや明和の初めより女髮ゆひといふもの出來て近世は猶盛んに成たり院本源平鴨鳥越(鵜)　明和七年寅九月　四ノ口に女中の髮を由井の濱お花といふて當世にもてはやされて鬧しき襷襗蔽膝(たすきまへだれ)かけまくもちよこ〳〵走りの向ふより亂れし髩(つと)の後(をく)れをもツイ撫付にヲヽお花樣お前の内へ行處云々と書りまた富貴地座位とて安永中の小册三都の名物を評せし書に

未刻太鼓といへる狂言の頃までは極てなかりしものなるに今は遊所はもとより町々にも羣て住町の女は遊處めきて心ときめかし或は長町とまりの旅人の珍らしがりて茜裏ながらつむり斗りの土地に馴たるも鵺をや思ひ出ていとおそろしげ也

交合雜記ニ云

南涼(龍)院殿家儒奈波(那)道圓に尋給ふハ女の子を育るにはいかやうに幼少より教立たるがよきぞと仰有ける道圓承ハりて御前にはいかゞ思召させられいや尊意を承たく存し奉るよし申けれハ賴宣卿女は貞信の道第一の事なれハ此義を幼少より合點させとかく聖賢の道を說聞するを專らと敎ゆべき事にあらずやと仰けれハ道圓いや左樣に

てハ御座なくゐまつ女の子にハ幼少より髪を自身ゆひ習ハせ扨把針（ヘシ）を致し習ハする事是第一の義にて御座ゐ大身の者の女の子ハ幼少より終にさやうの事をせず髪上ケ物縫とて打わたし置（はりまこと）ゐ上にも御存し遊ハさるゝごとく事けハしき時には御大名の奥方とても家女をたのミにして何と成へき事にあらす左様の時亂髪にては見苦しくてふがいせうに相見へゐ把針達者にゐへハ何やうに破れ損したる所も速につくろひ申ゐ間御大名の御姫とても此義猶以て第一の事に存ゐ貞信の道女ハ第一にてゐへ共是は教にも及ハずゐいか成匹夫の女とても蜜（密）夫を仕りてあらハに申ス者ハ無之ゐへハ悪しき事と存る事ハおのれもよく存じて罷在ゐその家法正しく仕置致しゐへハ左様の義は自然と貞信に成申ゐ只教へたる斗りにてならハし悪しくゐへハ不義なる根性の者ハ中々用に立不申ゐものにてゐ箇様に申上ゐとて聖賢の教をふらせまじきにてはなくゐまづ右の通りをよく習ハせゐを第一にして其上に教へ可申事にてゐと申けれハ頼宣卿深く御感歎有て御女子方へは自身髪をゆひ給ふ様に把針の事かたのごとく御營有るやうにと教訓し給ひけると也

一 婦女とうろう髪流行

太平樂府に　滅多偃伏（ノメラス）金丞相　無上張出燈籠鬢

〔編者曰ク原本此ノ所半丁餘空白〕

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一 明和年閒　春雨ふり續きけれハ里村紹甫河州佐太の天神に詣てゝ

降もなをほとよく晴て春の雨の天滿神の光りあらハせ

と詠せしかハ忽空晴けるよし和歌の德いちぢるし

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一 島之內妓婦　梶の話

寶曆明和の頃にや島之內春木屋某の抱の妓婦梶といふ女生質大氣ものニ而容儀美ならねど三弦（絃）は法師の名家をも欺き且茶の道生花香道にも熟練し又手跡は長谷川流の能筆にて萬事人の下ニ出ずおのづから全盛と呼べり髪の錺り櫛笄など大金を出して求るといへども花車仲居の輩これを譽れバすぐさま其ものニあたへ客に無心をいふにも百金より下はいひ出ず依之遊客も容易には馴染に成事難し田中卯左衞門といふ人に請出されて妾と成たれ共驕奢の甚しきゆへ暇を出す其後京都の富家に至れ共始に同じ夫より東武に行て妓婦と成り梶といへる名は彼地までも聞えある事なれバ一たひは盛んなりしかハ共いつしか花を失ひ終身は知らねども古今希有の大膽不敵の女也

或人云　かぶきの若女形藤川山吾兼而太夫本を勤メ度思へ共其頃の歌舞妓芝居太夫本は餘程の金子なくてハ勤らざるゆへ詮方なく打過るよしかの梶女聞て其儀は何程の事にやと問ふ凡二百金餘りハなくて叶ハじといふいと安き事也と頓に其金を調へて山吾に與ふ山吾よろこびの餘り其恩義を忘却せまじきためにとて

京都にて太夫本勤る時定紋を如此　 　改めたりとぞ

安永四年　同五年　京都座本

天明二年　同三年　大坂角之座本つとむ

一　茨木屋正太夫うちかけノ事

船場瓦町邊に刀屋九郎兵衞といふもの新町ニ於て其頃全盛の名高き茨木屋正太夫に馴染て佐渡すみの客也正太夫へうちかけを送る事三年に及ぶ其物ずきいはん方なし初めの年は淺黃繻子裏表ニ銀絲にて鰯を縫ひ其上に金絲に而網を掛たり鰯網の物數奇(寄)とて廓中大ひに稱美せり翌年は花色繻子ニ阿彌陀の後光を金絲に而縫ハせ三年目は花色の紋緞子牡丹の模樣に刀脇差の目貫に用ゆる金の獅子を以てかの牡丹に隨ひて亂曲のかたちを縫たり獅子の數三百六十五といへり依之金目貫を衣裳ニ縫付たるよしとり〴〵の風聞にて町々よりも物見高き婦女等此衣裳を見んと羣集なしけるゆへ　公邊へ相聞え正月十九日佐渡すミ及び茨木屋正太夫も召出され花美なる襠を着用致閒敷由被仰付ハ

一　街相僕(撲)若之助の事

古文鐵砲云　大關若之助といふ者あり天地をもつて角力場とし東西南北を以て四柱とす煙雲を水引とし山岳を土俵とす邦國の城郭ハ皆棧敷たり郡縣の來往ハ皆見物たり關脇小結前頭ハ我一人にそなへしと大手を振て力足

年老て若之助みどりの前髮志ふ帋の周身腹空しうして口嘩(カマビス)し或人の云クそれ角力ハ力士東西にならふをもつてこれが名とす今汝ミつから角力といふは如何答て云我に對すべきものは酒也以て一方(カタヤ)の關とす我常にこれに勝然といへ共酒力はなハだしき時はこれがために弓を取らる今酒力至て薄し故に投錢をこふといふこゝにおいて見物四方へ散亂す余が曰これ角力の果口か嗚呼これ角力の果くちか

一　名代之走坊傳

同書云

老僧不知何人。亦不其詳所出寺院。蓋陰陽之蹻脈厚而。終日聯翩於浪速之名區。足逸驚飈因以稱走坊。坊聞之曰甚善。名我固當。又以自目號名代走坊。性躁而多言。屢貪米錢曾廢餕餘。不好瀝酒不婬女慾假令雖好可誰敢共閨房。哉憩志於佛門能釋街說法。衆人開口頗淡笑。於是乘其賞而曰。止寂々之論辯而轉至操狂言乎路光無閒鐘。慶子石橋。仙魚雲絕閒。各委其所好亦請孔方見者罹弶而投錢如因孫氏之孝心天感雨於金錢受笠包袂。後坐不言。衆人嗔膽奮然扼腕。坊曰訛人賣僧之常。褰衣奮杖飛行如風

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　愛染參りの事

富貴自在ニ云安永六　上木　正月元日愛染參り

新町より元日の愛染參りもいつの頃やら絶しとなん聞しに十とせばかりこのかた頻りて今猶うちかけの裾高く青きを踏初るなんど古きをふたふ姿うれしけなり

〔編者曰ク原本此ノ所七行空白〕

一　名玉天地說ニ寶曆明和の頃の風俗を書たる條ニさらバ當世の風義をいひ聞さん今ほど物の用達自由なる事ハ天地開闢以來なし家建も前々見るとは大きに相違して繁花の地は勿論城下〳〵の廣邑まで瓦ぶきにあらぬ所もなく其うへ往還の大道うちの軒下を我ものと心得上店下店などこしらへ軒を並て瓦のたれ屋根にて一面に二階づくりとなれども見越の諍ひもなく建つらねしは太平の代の大まかなること有がたしとやいはんされバ町家を買求るに奥長何十間何尺とつもりて賣買するに軒下三尺餘の間數ハ町の籍には無きをもつて軒下にてくわへきせるを法度仰付らるゝも大道なれハ也箇樣に有がたき四ツの海ふづかなる時節人の風俗もそれになれ布ならでハ着ざる事やう〳〵百六七十年になる間今は綿子と成りそれが榮耀に長じ絹物着ねバびんぼう人と見る世界なれハ昔の風雅なる體はさうなくいかに人が咎メねばとて月代といひしさかやきをそりひろげしはまだしもなるに中剃と名づけ亞門までそりさげすこしばかりの髮を鬢附にてかためつけ結あげたる所をつぶ髷と名付其外お家さんもたせのんこおたくらゆひ髷などゝ時々のはやり名の髷をこしらへ天窓をなぶり物にするていいとおかし衣服の袖も壹尺餘ならではなかりしに今は一尺四五寸にてかます袖と名づけ四角に縫たて異類異形の體相化物といふも外にはあらし履物も中古まではわらざうりなりしを利休居士初めて雪踏といふもの拵へられしより近代は又樣々に成て板の上に雪踏の表をつけ五分板と名付はき歩行事いとさうく〳〵し或は顏を人に見ふらるべきものが目斗り出す忍び頭巾を着て飛歩行女を見るやうに世を忍ふものかなんどの風俗一向合點の行ぬさま也女もこれにつれかづき物に顏かくし人に見らるゝ事を恥らふべきを置綿などゝ額にばかりちよいとをき顏を世間にさらすありさま昔とはあちらこちら恥らふべき女は顏をさらし人に見ふらるべき男は顏を包ムがならハしとはなれり勿論女の髮の風なども大吉髷金相如富十郎髷なんどさまざま〳〵此頃はときぐし髮とも燈籠髮とも異名付ケ髮ばかりを横へ五寸ほど出しばら〳〵したる體髮は短くこれも昔とはあちらこちら其うへ髮はりとて鯨で製たる簇のやうなる物を髮へ入れ横へ張出し髮の落ぬやうに指込ミ居るも餘りしき事ども夫のミならず鼈甲の櫛笄大まいの金銀を出しさしひからすをよしとするは唐土晉の王愷が牛の角に金箔を傳しよりはなハだたわけたる體也遊所〳〵は猶の事これでハ面白ふない粹じやないまそつと僻たい物じやとゑならぬ風俗女郎は鼈甲の櫛さすもうつとしいとかんざし斗り八本あるひハ六本ツゝ、後光を見るやうにさしかざし是を千本かんざしと名付もてはやせバ夫につれたる町の女の風も段々年々にうつりかはり昔は男女ともに帶幅は二寸或は三寸ほど有しに今は女帶は八寸或は壹尺なるを薦樽見るごとく卷て結ひさげたしなむうへにたしなむやうに見ゆれども熬鯨を早葱とあへたるをバつほ〳〵口して喰ひ男は鼈肉たいて喰をよしと思ひ口いやしとやいはん下卑たるさま言語に絶し衣服のすがたは昔の富家といへ共今

のびんぼう人の形りには似ざりし其餘茶の湯などこのむもの、古き缺ちやわんを愛しひつきやう唐の猫の飯器も知れぬを取集め樂しミとするも蓼喰蟲もすき〳〵勲おかし貴人富人はいかさまびんぼうなる事を知らぬゆへ夫を見習ふため此道を好るもいと殊勝なる心も有べけれ中ぶん以下の者此道をたしミあたら金銀をなげうち家藏賣て鰥ヤモメずミ貧なる暮しを稽古する事もおかしとかく世はせハ〳〵しくなり是では面白ふない是でもおかしうなしまそつと仕樣は有まいかと當風の習ひにはめつたにゑならぬ風俗を好ミ何ぞ珍らしき流行事人の目にたつかわつた事を仕出し世わたりの爲にもならんと工夫するもの共もふからぬ〳〵といへど天地開闢より今年まで算數にてかぞへ見れバ六萬八千二百年に成るもの金もふけがなふて今迄世界が立ものか盡ぬ世界といふもの有がたしこれよりゆく先キ萬々年の時津風さだめて其うちさま〴〵の珍らしき風流なる風俗も出來つらん見るべし〳〵

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　俠夫之事

勇に智勇あり血氣の勇あり元祿の頃より享保ニ至り浪花に隱れなき達衆數多あり又元文の頃より明和ニ至り已が趣意を果さん事を專とす夫をいかにと聞ハ各不實場の爲にして人より頭立んと無法我儘の達衆にて入牢する事を其道の昇進と心得る族も又多く終には死遠の二ツと成ものあり適々末町に行て見るに假初にも大肌を脫きその腕にはクリカラ不動般若の面ン眉間尺獄門ろくろ首などの入墨をなし其外胸さき脊に至る迄わんばくな手習子供を見るごとく彫り散らして名高かりしハ

茶船五郎右衞門　東堀濱　芝田ノ忠兵衞　堂島藏
宇野金十郎　仲仕達衆也　仲仕
硯箱ノ勘右衞門　元ハ三州岡崎水野家ノ足輕也中頃大坂ニて納屋下と成其後梅ケ枝新地ニ住シ盜賊ニて死刑　本町　上町住
古手ノ吉兵衞　鐵カネ　ノ太兵衞　達衆
大工ノ與兵衞　梓方　大工職　不死身　楠ノ彦兵衞　梓方　燒繼キの長右衞門

○安永元　壬辰〔十一月十六日改元〕

一
一三月三日より　堀江あみだ池にて京北野願成就寺五十日開帳
一同　日より　下寺町萬福寺三十日開帳
一同　日より　生玉銀山寺大安寺大寶寺開長
一同　日より　攝州須磨寺開長
一同月七日より　箕面山辨財天開長
一同　十八日より　上福島智福院開長
一同　十九日より七日ヶ間　濱の墓源光寺二萬五千日廻向
一四月上旬より五六月の頃まで京大坂時疫流行して人多ク死ス別して中分以下非人など夥敷死ス
一五月一日より　住吉にて江州竹生島觀音五十日閉開長
一同　日より　住吉平尾山光林寺三十日閉開長
一八月十二日より廿日迄大雨　同廿日京都大風
一九月廿日　京都近江屋次郎右衞門死　千日自安寺ニ墓あり　秋松院一峯信士

誰か氣にもよくもあふミやあふミやともてるたいこの世に鳴し人

戯文太平記忠臣講尺(釋)の茶屋場に取組しうがのみたまの治郎右衛門なり

一同月廿七日　月日星の三光現るゝ

一八月　高津社高臺碑建

御　製

高臺于升而見則煙起民之竈者贍爾兮里

高臺之頌

猗與鷦鷯聰明岐嶷昆弟克讓互辭天祿稚皇就節斯始登極有若王仁徵自百濟開學授經宏亮帝制高臺登望烟少民饑帝心不安儉身維貪除租息調恤孤養老宮垣不亞梁楹不藻三歳豐饒炊烟起堆望知民蘇造歌高臺元聖輔君賦難波梅籠冬逢春詠斯花開帝德廣運庶事熙哉造宮營室兆民子來穿開堀江通海曳川茨田築堤萬億墾田惟端午日始獻菖蒲永爲恒式以顯德符白鹿示慶連理呈祥四海沾化洪澤無量褒聖贊功金石欽勒仰頌至聖永世不革

明和九季壬辰秋八月朔旦

平安　芥煥彦章甫　謹撰

浪華　牟純平介甫　謹書

この碑を世に非高臺碑　非非高臺碑の雑論あり

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一八月　大相撲　勧進元　荒鷲孫八

今年より疊札切落シ始ル

東ノ方
大關　釋迦ヶ嶽　身長サ七尺一寸二分

古今希有之大男也九日目迄土俵入斗り

十日目

西大關
波戸ヶ崎　東大關　釋迦ヶ嶽　勝

今年切にて再び不來

一住吉濱ニて汐汲鹽がま魚の濱燒見せる

〔編者曰ク原本此ノ所參行空白〕

一九月　南鐐二朱判四文錢始ル

四文錢の事　田沼主殿頭家來川合治郎平

以上ノ書入レアリ……井上伊織兩人の工夫也伊織が生國は江州滋賀の浦也去ニよつてゑがの浦波と川合の川

……原本此ノ所　川合は元ト小普請支配より御勘定吟味役ニ相成五百石

といふ印にて裏に波のかたちを鑄たり色黄になしたるは松平右近将監殿工夫とぞ都而箇様の事を工夫せしもの、印を裏に付る事其例あり　二代将軍秀忠公の御代文錢を鑄るこれ深屋文藏が鑄たるゆへ文の字を印に付ケ鑄たるよし　新錢の裏に浪のもやうを鑄たるハ四海波靜成を壽き祝し四方隅々迄も行屆くやうにとて新錢座を立て鑄る世上是を四文錢と唱ふ其節の狂哥に　代物に思ひも寄らぬうら波にあらハれ出し眞鍮なこん　此四文錢ハ眞鍮を以て製するゆへかくよみたり……原本此ノ所以上ノ書入レアリ……

因云　むかしは遊里にて幣閒などに花を遣ハす事露を打といひたるよし艶に聞え侍る又花といへば金壹歩宛に極たる事にや後年貳朱金といふもの通用せしより此二朱を遣せバ鶯と唱ふ其謂は壹歩にあらざるゆへ花になくといふ心もおかし

〔編者曰ク原本此ノ所壱行空白〕

一　今年福島嶋田氏大木の丹楓枯るゝ高サ十三閒南北の枝廿閒斗りも有之惜むべし

一　九月　一世一代　立役中山新九郎　俳號一蝶

角の芝居小川吉太郎座ニ而九月九日より

十帖源氏　物艸太郎

同年一蝶郡鞆枕といふ小册出板初ぶたいより一世一代まて五十年出勤故かく題號ス

享保八卯顔見せ大坂中の芝居松島兵太郎座初ぶたいニ而寛保四子顔見せ姉川新四郎座へ出勤にて此秋姉川氏

より黒船頭巾草履下駄を譲り受る今年の一世一代大坂中御最屓お馴染の仁ゆへ初日より大入序ひらき浪人伴作役序切よしかた館へかけ付て山三との出合の所より別して四段目お國御前を迎ひに奥より出て則此處ニ而一座の立もの上下ニ而罷出子息文七引合口上にて相濟其身段々是迄の禮を述五十年來ぶたい出勤との口上一世一代相勤ゐ儀も恐多きとの辭退口上尤至極也切狂言も中々大丈夫の致されやう色事の段至極〳〵切の働キ物語の場迄受よろしく先は大慶〳〵

一　南鐐銀は其性甚よろしからず元來誠の銀にあらず石州銀山より出る所の銀へ灰吹の屑白鉛の屑等を吹交へ御府内の銀座町にてこれを吹せ四方へ星を付る此星は二十八宿を表すといふ或は田沼主殿頭の定紋七星をやつしたる物共いふまたは表に銀座常是の名あり裏に如此銘あり

以南鐐八片
換小判一兩

或とき肥前長崎表にて唐人此南鐐を見て其銀の麁なるを笑ひ且南鐐と名付しは如何の趣意に寄るにや其當れる(理)利を知らず勿論今の天下は紀伊家より出給ひ南鐐より御相續あれハ南家の南の字を用ひ給ひしや能き白銀を南鐐といふなれハ斯は名付給ひしやといふ

阿蘭陀の砂銀と稱じて砂の中より銀をふるひ出して是を吹て銀錢とす丸さ日本の鳥目よりは小さくして無穴也裏に阿蘭陀の文字ありて表にいさゝか畫ありとぞ

此鳥目日本の金百匹などゝ同じ鳥目壹貫文に通用するにあらず穴あるを鳥目といひ穴なきを錢といへり

田沼主殿頭此よしを傳へ聞此銀を先五十萬貫阿蘭陀より取寄て日本にて吹つぶさせ大黒長左衞門に申付て南鐐に吹せ申べしと也伊豆守差圖を得て長崎奉行より阿蘭陀へ申遣ハしける時に船路一萬三千里たれハ海上一年掛りいへでは着船せず元來風波の難はなき所なれ共何ぶん異國の義覺束なし少時も早く渡海致すへしと相談ありて急に阿蘭陀人を船に取乘せ長崎を出帆させんと銀錢の義を催促ありけり

評ニ曰　此銀錢の銀を流水銀といふ阿蘭陀に銀水あり其底に有所の砂をよく水にて洗ひ其かすを取て吹く實の正銀にあらず吹まぜ銀也此度阿蘭陀へ銀錢を申遣ハし日本の寶を費さずして外夷の寶をつぶし利用益德を以てせんといふ了簡より事起り日本の鳥目三銅ツヽにて銀錢を買取べき積りは松本伊豆守田沼か下知を得て專ら沙汰す寔に利簡の至極とやいはん爰を以て大きなる　公儀の御益と稱じ過半は我倉庫に納む不仁の賊臣天何れの日か彼等を罪し給ハんや

〔編者曰ク原本此ノ所貳行空白〕

一　明和九辰年霜月年號改元ありて安永と成しかハ或人の狂哥に

明和九は霜月きりに辰のとし巳の幸ひは安永の春

〔編者曰ク此ノ一項ハ著者濱松歌國ガ後ニ書キ入レシモノニテ墨蹟多少變リアリ〕

安永二　癸巳

一

一　六月九日　城州木津川堤廿餘ケ所切れて淀伏見洪水

一　七月八日より十二日迄　大風雨淀川洪水

一　十月十六日　平野大念佛寺開山眞忍上人長承元年二月一日入寂　年六十一　勅して聖應大師と贈號ス

一　木端翁死　尼崎町善行寺の住持にて狂歌に名高し由緣齋貞柳の流れを汲て木端派と稱ス

〔編者曰ク原本此ノ所參行空白〕

一　新町龜屋千町太夫を加島屋久左衞門受出ス身價千三百五十金餘と也希有の價なるゆへ近世の珍事とす

一　投扇流行

この遊びは京師より發りて浪花にうつり東武に至りて專ら流行ス投扇興譜といふ小册に式法くハし

表十二組

苅穗　二十五點　御幸　二十點　筑波根　十五點　千鳥　十三點　富士　十二點

三笠山　十一點　有明　十點　錦　九點　雲隱　八點　散花　七點

置霜　五點　山颪　三點

裏六組

軒端　五十點　若菜　卅五點　乙女　卅三點　白雪　卅二點　御垣守　卅一點

因幡山　三十點

一　五月十二日　芭蕉翁舊跡にて追悼

芭蕉翁舊跡

たちやのうらはす

浪花旧國

祖翁なるはの蓑と浪まひし様なるは
あとハ御堂なる若やのうらと申候て御さかに
そはまるをもたつね侍る人なしなもひさしくはるな
志れなから能はさへもなくて折るぬおとしいらぬ
幸にや尾張の嫁程ぬし翁のぬるまあとを
たはれたやとの題すて屋川ナ叟雄山の二三子
あそろ御をつかせかろのふぬ御方の志るへをりて
かくらひよりしハ南の御堂とお南久左衛門

中ますゝハ祖翁の書跡唯これとやおほし
め御ゝん風雅のこゝろ後に周ゆゝ紙との二階から
さる事を後もおちるもうかふあむたらさ紙をと
かきさして翁をさしてふ人ゝ子をぬるき此の
正しく書する事をさしらし先待る抱之

安永二年己巳五月十二日　宗二軒禹國
洋誌

一座捻香

何ゝ那く小かまも此れかわり此
さしらの花も未摘む事ら式
なりしまやまゝ人梦のあれ
搗のあれやむしの貸ひしき
椎のあやゝろをこゝろて此意る
梅椎の花より道のさわりさむ

羅川
雄山
玉所
蝶羅
雲亭
生木

已上

因云　翁の白菊之句の一軸此雅會の催主大江阪舊國家藏とす

白菊やめにたて、見る塵もなし　はせを

此一章は先師難波におはして園女か垣根に是を申されし句也されは甲戌の秋長月の末なるへしこれを生前の筆の名殘とおもへは殊更になつかしく今この事をこゝに書添たるなり

一五

元祿辛巳のとし

一　同年　山嵐

去年阿蘭陀より薩摩國へ傳來なし今年春より夏に至り大坂道頓堀へ出ス　和名山嵐といひ疫病疫難魔除疱瘡の愁ひを除くといひ傳へて諸人見物群集ス　畫帖ニ圖アリ

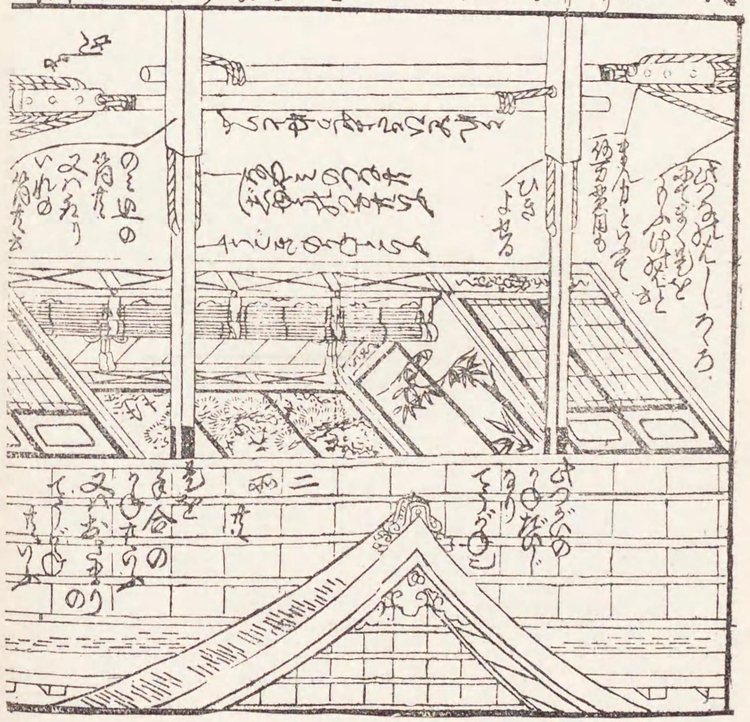
一　二月十六日夜　歌舞妓狂言作者竝木正三急死

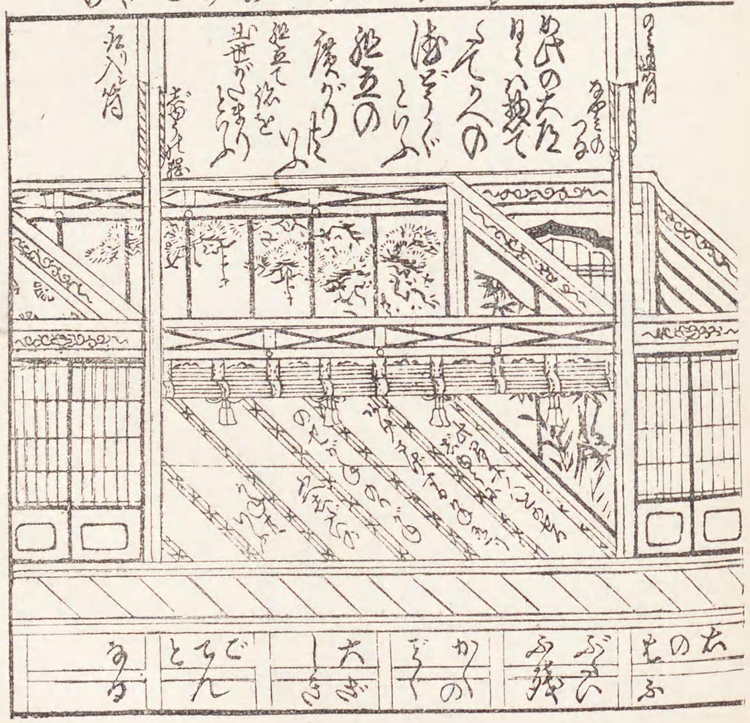
竝木正三狂言攫（サラヘ）ニ云　難波の江南に青チよしあしのまさな事を書集る妓藝（ワサヲキ）の作文をあらハせし中にも古今に獨歩して此道の流れを汲る輩は孫子吳子が肺肝に入しかとうたかひ諸葛亮がいさほし共おもほゆるほど功名を遂し竝木正三は古今の誹諧哥史記の滑稽にひとしき作意をまた當世に滑稽せし妙手にして淨瑠璃に門左衞門哥舞妓に正三とならべいふ共恥しからず其父はもと雲州の仕官にて聊仕へを辭する事ありて大坂堀江に漂泊し諸木或は艸花金石などより油を取法南蠻の祕傳を鍛練しいやしからぬ家業をいとなミ正兵衞と呼れ暮せし內奴正兵衞とて人の道とんぼり元堺町扇子屋方の遊客と成しも然るべき値遇にや扇子屋の娘に契り正三をもふけ幼名を久太と呼ぶむつきの內より櫓太鼓の響を友とし竹馬の頃は哥舞妓の樂家に遊びまたは操芝居へ入込ゼンマイつもり物の絲取を見覺十四五歲の時若水千歲狐といふ手妻からくりの水船の仕かけを工夫し其後元服して正三と改メ生涯の戲作七十餘番に及ふ時に明和安永の頃は時として胸痛ミの病

東花坊

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

東山殿女巻狩





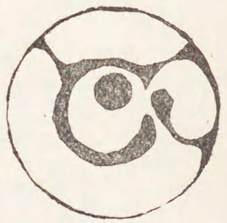
症おこり惜むべし安永三年癸巳二月十六日の夜八ツ時に俄に心痛取つめしにや大喝一聲南無三寶と一句を
殘しこと葉の花筆の林のあけ〳〵なる並木の主も痰火のせり上にせまりふさぎしまぶたも廻り道具と目く
るめき四十四歳の春秋を一期の夢の幕と成南無三寶正三の墓と法善寺にあるしを殘せり

戯財錄云

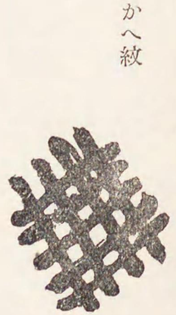
並木正三　法名　當譽正三居士

道頓堀和泉屋正朔悴(倅)幼名久太郎と云作道を好て寛延二年和泉屋正三と改メ作者と成て哥舞妓へ出勤夫より
並木宗介千柳が子ぶんと成り操にても出作する元來かぶき作者を好ミ出勤せしより元來舞臺の大盡柱を取
場の中の柱も取て見物の目障なきやうにしてセリ上ケセリ下ケ廻り道具三段返りのガンドウ其外數々の道
具を工夫仕出し顔見せ狂言の序に化物を出して見物の目を覺させし始メ作者にてもまねきの前看板出す始
メ不出來芝居を取立役者を見立つかふ事を鍛練して外題の頓作見物の目を驚かし威勢は古今獨歩にて座頭
をも呼捨にし誠ニかぶきの作者鏡共すべき人物正三一代の當狂言其外所の賑ひを工夫仕出し英名海内に響
し事人よく知る所也委しくは並木正三一代噺といふ小册あれバ爰に略ス其頃粹名に名高き内山枝柄筆作に
て道頓堀法善寺石碑の銘に著ス其比の噂に作は近松門左衛門に並木正三才智は梅田宗庵竹田近江並木正三
右三人有ゆへ大坂中おそるゝよし評ス正三高才によつて並木千柳子分と成りて並木氏の本家とす安永二年
二月十六日卒ス行年四十四歳中寺町法音寺に葬ル

紋所は



かへ紋



九本ノ撮子木

當正軒ともいふ

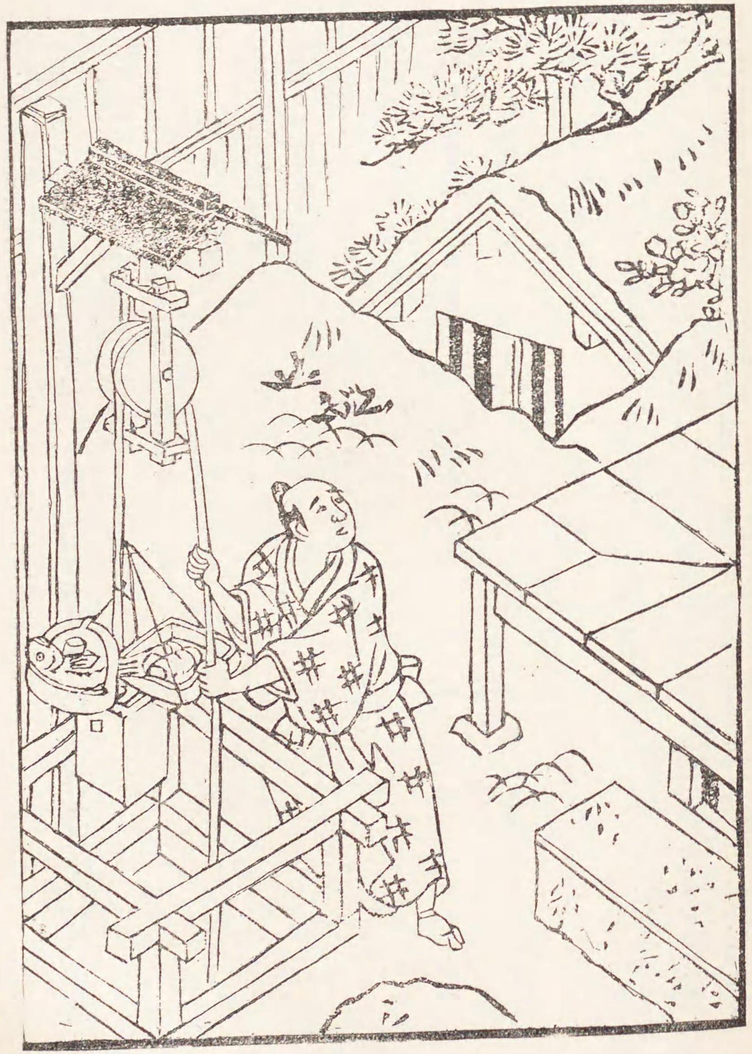
並木正三の居宅は吉左衞門町にて親正兵衞に孝心深く（剃髪して法名正朔といふ）隱居の座敷をふつらひ又は二階へ庭を
築き植込ミ飛石などを置キ井戸をすへて下の板元の窓とし釣瓶を風せバ酒さかな南艸盆まで汲上るやうに
仕かけ料理屋を企て活氣なる親の心をなぐさめたり其後亦々相合橋南詰東へ入龜谷濱芝居の向ひへ新宅の
茶屋を組立二階に植ごミ中庭を拵へ大きに端手成ル仕かけ成しがたもちがたく止ぬ夫より難波へ引籠り又
島之内布袋町へ宅替なし此所にて卒ス

一　七月　並木正三追善

北堀江此太夫芝居にて

南無三寶
正三追善　極樂往來蓮寄初　豐竹綱太夫つとむ

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕



一七月　大坂市中大踊　諸方ニ催シ大羣集なす事前代未聞也

一十一月　中之芝居嵐松次郎座午之歳之顔見世ニ江戸表より尾上菊五郎卅三年目にて罷登り乗込之景氣大羣集せし事梅幸集ニくわし

十一月六日より顔見世　夜十日　晝七日興行

大當百足山

一同年閏の替り假名手本忠臣藏大當り

十二月三日より翌午年四月三日迄大入

同初日より午三月廿二日迄日數九十五日之開棧敷賣高　壹萬四千九十五閒半

一七月十六日　天王寺安部野街道心中

同月廿四日より角の芝居一夜付ケ狂言七月二八曉（アケボノ）

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一兵庫西宮　天料ト成ル

村老云　兵庫西の宮共尼ヶ崎城主松平遠江守殿領分なりし所今年領地替仰付られ夫より　天料と成たり年貢の取立は御代官支配市中人別之義一體不殘大坂御町奉行取計ひ可被致旨　台命に依て夫より町奉行組の與力一ケ月代りニ勤番ス此所ハ灘目一體神戸（コウベ）大石等尼ヶ崎領なりしに今年皆々天料ニ成けるゆへ遠江守難澁少か

らす乍去此義は子細ある事也

〔編者曰ク原本此ノ所八行空白〕

一並木正三狂言攫　天明五年出板

序

並木正三狂言攫

嗚呼おしいかなおしむべしおしてる難波の江南に育ちよしあしのまさな事を書集る妓藝の作文を顯ハせし中にも古今に獨歩して此道の流れを汲る輩ハ孫子吳子が肺肝に入しかとうたがひ諸葛亮がいさおしともおもほゆるほと功名をとけ身まかりし正三といへるハおふけなくも往昔慶長御治國の惠を蒙りたてまつり名左衞門太左衞門抔樽を道頓堀へ御赦免あり下し置れし已來多くの狂言作者にも事かわり一流の譽れをのこしあまねく古今の俳諧哥史記の滑稽にひとしき作意を又當世に滑稽せし妙手とやいわん淨留利に門左衞門哥舞妓に正三とならべいふとも耻しからず其父元は雲州の仕官にていさゝか仕へを辭することはべりて大坂堀江へ漂泊し諸木あるひハ艸花金石などより油を取法南蠻の祕傳を鍛煉しいやしからぬ家業をいとなみ正兵衞と呼れくらせし内奴正兵衞とて人の知たる男なり　道頓堀元堺町扇子や方の遊客と成しもふかるべき値遇にや扇子やの娘に契り正三をもふけ幼名を久太と呼しにそのゝち故ありて正兵衞右扇子や娘のいもふといづみやといへる芝居茶やへ入贅して連子の久太を養育せしゆへ襁褓の内より樽太鼓の響を友とし竹馬のころハ哥舞妓の樂やをあそび所又は操芝居へ入込介錯のたすけと成からくり芝居の下屋へ這入ぜんまいつもり物の絲どりを見おぼへ其節親正兵衞出羽の芝居世話せし時　今の角丸芝居の向ひに有りし　若水千歲狐といふ手づまからくりの水船のふかけハ久太十四五歲の工夫なりと聞およびぬ夫より後元服して正三と改めはたちにたらすして大西の芝居にて　今の筑後の西大長あたりに芝居ありし也　中村喜代十郎といへる女形中ヶ芝居を興行せし時中橋筋大寶寺町西がハ枌子屋の隣鍛治やの娘手をおひし噂を三番續の狂言に取組寛延元年辰ノ八月右喜代十郎芝居へ出せしが正三哥舞伎狂言の書はじめ也　則其時狂言作者泉屋正三と名まへを出し

同年霜月角の芝居坂東豊三郎座へ出て多籠妻乞軍の顔見世狂言おもしろく二のかわりハ其節の噂ものしを
とり組戀淵鮫絞染といふきやうけん笛十と共にこしらへ　これ高田端庵と　巳の春中大入をとり四月がハりの興
作の作りかへハ笛十斗のよし評判たぎらず同七月にハ正三男作養老瀧といふ水狂言を出し黒船忠吉放駒長吉を
故三枡大五郎獄門の庄兵衛野手の庄兵衛を哥右衛門にて　今の哥七事此本ニてハ此兩人の早がわりに又はんじもの
ゝ喜兵衛を親仁にて豊三郎にさせし事ども大キにあたり巳の霜月より大西三枡大五郎座ニ而壽黄金勝軍といふ顔見世狂言故岩井半四郎江戸よりのぼりて評判よく二のかハりに大和國井手下紐是又大キにはづミ午の四月迄大入そのつぎに若葉結旭櫓現松これハ檜皮や心中の一チ夜づけ也　何によらず急に仕組て初日を出すを　これもたいがい入をとり其跡がくりかへしもの同じく七月より作りかへの薄雪遊撰染水狂言にて猶も評よく其内芝居相休當暮より淨留利作者故並木宗助の門弟と成　これあまねく並木苗字　此人に隨身して豊竹　操　座へかゝへられし所
の元祖ニ而一名千柳　かりうけすなはち　早川又兵衛　蝦夷之　三人組染貫模様の
未の七月より中村哥右衛門座角の芝居へ豊竹より正三をスケに借受　新介　鹿ノ土左衛門
きやうけんあたり其後おりく十兵衛の一夜づけ雨防紅莚薩大キに評判よく九月がハりハ藤川平九郎京より
江戸へ行暇乞に三十日のスケに來り織田軍記紅葉籠これ又大入然るに宗助當十一月中旬一谷嫩軍記の三だ
んめを書ながら病死いたし師の遺命によつて申のとしハ豊竹をはなれず同年霜月心にそまぬ事ありしや角の芝
居故三枡大五郎座へ住並木正三と姓を改め藤川平九郎江戸よりのぼり名護屋織雛鶴錦の顔見世よろしく二のかハり三河國照田姫昔物語おもハしからず酉年二月より高臺橋畝烏らいでん源八喧嘩のきやうけん大キにはづゝミ四月には西東合見臺これハ竹田の三切ものをうつせし趣向にて舞臺道具を寄麗に仕立はり込しゆへこれ

も諸よく跡へ河堀口の心中冥途一里塚とて又切きやうけんをつけしより六月迄持越七月替りに金比羅御利生幼
稚子敵討雛助故他人子役の姉弟にて豊三郎をたのミ故大五郎を力にかたき平九郎をねらふ狂言嵐小六の仕内な
とミな〳〵大々あたりにて跡ハくりかへしもの酉の霜月大西三條定助座へ行顔見世泰平木曾譚故中村十藏　後ニ
吉右衛門　能登守にて氣違水こほさずのつかひ方大キによく同暮疫病の咒に門〳〵に張札せしキノニノヤノハ
ノモノといふ事をおもひより二のかハりけいせい天羽衣といふ狂言を出せしが正三一代名をあげし根本にして
大切ゥに三間ン四方のせり上を工夫仕出し大坂町中を悦バせしも全くおさなき時より竹田のからくりつもり物
の絲どり萬端見おほへ置し發明ならん尤其以前寛保三年癸亥年の暮大西故中村十藏座へ江戸より故澤村宗十
郎登り後ニ助高や　齋藤山城にて油計のきやうけんの時二階ざしきを一めんにせり上しハ故並木永助作りしきや
高助といふ　うけんなれ共これも元祖　其時のせり上ケハ幕明よりかざり付の二階にて前どふり椽がハかうらんの兩方へ摺柱
宗介弟子也
をこしらへ上へに立しは故宗十郎斗おもさハいつも下家より一人前のせり上ケに椽がハかうらんつけし同然今
度キノニノせり上ハかざり付ケの揚やの道具を引て取り奥より三間ン四方の板ぶき屋根を突出し上にて故中山
新九郎大勢と立有て追込一人ン殘る所へ中山文七松嶋喜代崎出て故新九郎をいさめ腹を切り自害する内これな
りに三人一ッ所にせり上ケる下タの家體に故十藏哥右衛門定助故四郎五郎立チならびて定助へ文七喜代崎が流
れ落る血汐を呑し痞をなをす趣向なれバ此七人をせり上る前にハ大勢屋根での立故宗十郎一人が長袴のすつく
り立チを椽がハばかり上ケしとハ何ほど重さ違ふ事ぞや大工棟梁のさんだんも有ふなれとも正三ならすして萬
力の仕かけ眞綱の取やう此工夫が付べきや凡人の及ぶ所にあらす此時春正月中の上り銀高を書顯ハし樂屋の鎭

守の繪馬にあけしハ前代未聞といひし事也此狂言戌の四月迄大入し其跡へ三韭太夫愛護稚　を一ツにして五せつきやうといふかんばんだし狂言本出來せしに　後に此書をうつし取正三死期　小栗苅萱隅田川　七條茶湯の釜入と外題して　これは後に淨るりに出　其時故有て不出其跡へ　川原　看板出しかど是も初日不出座中もめ合くりかへし物に成それより五月に中の芝居故嵐三右衞門座へうつり丹波國助太郎館　今年東の芝居にて女大學　此狂言も故あやめ平九郎大キに出來され其内又角の座本故大五郎親友にて　無據たのまれ奥州遊行柳の四九次郎場を仕組遣し七月替りハ此一ト場で大入をとらせ九月に中の芝居にて一休ばなしを出し下福しまの人殺しを持込で大にあたり此時の上り銀を以て亥の霜月顏見世を銀主より取立て同芝居故三右衞門座本にて天照太神岩戸曙と神代の顏見世きやうげん評ばんよけれどはねめなく二のかハり道中千貫樋故十藏平九郎の出合めづらしく螺貝わりの場受よく勿論切りには大道具見へもよろしくそれより芝居伊勢へ行亥ノ五月より皆〳〵かへりて　おそめ戀の盂蘭盆七月よりハくりかへし物子ノ霜月よりやはり中にて坂東豊三郎座本顏見世時代世話黃金榮といふ狂言座附終りに盛衰記の役割を役者に富にてつかせとんつな役にて仕込し顏見世　甚大入　尤　此年ハ一ツ方の作者の立者永助と正三同座にて二のかハりには定めて目ざましき趣向有べしとミな〳〵こぞり居たる所鳥邊山の心中に茨木や幸才を取組村烏廓音聲といふ二のかハりを出し大キに評判あしく冬の内三四日相勤正月初芝居よりもめ出し一向出來かね三月をまたず座中伊勢へ行し也正三も四月中比より思ひ立チ參宮して念頃成中なれバ故三右衞門部屋に逗留の内故三右衞門淫性の腹寒を煩ひ付他事なく正三介抱すれども次第におもり五六日の内に死去いたし泣〳〵其跡取置遣し五月の末に正三大坂へ立歸り其七月は角姉川大吉座をスケ草津小女郎の水きやうげん跡ハ古物寶曆六子年霜月よ

り大西芝居を取りて立切かハつた座本の名前大松百助　壽六法と顏見世きやうげん大キにあたり二のかハり天竺徳兵衞聞書往來極月廿八日に大いれの惣稽古して丑ノ正月二日より初日是又大入大評判故新九郎文七共にあたりを取り同年四月より四天王寺伽藍鑑此狂言ハ新淨るりに取り組ミ舞臺に手すりを操り同然にこしらへしゆへ又々町中の氣を取ッて大キに評判よくはじめて大字七くだりの正本ンを出し七月迄も持こしたるに芝居出來かね殘念に其年を送りし內京都扇子や孫八芝居より抱へに來り丑の霜月京都へ登り大社納結三番續此顏見世大あたり則染松松次郎座本にてあいの物ハ其比豐竹の新淨るり祇園祭禮信仰記これ又請よく三月より二のかわりけいせい飯綱八文字正二月前びろに仕組の手つかひよく故十藏故大五郎豐三郎嵐小六雛助など大にあたり五月かわりハ西陣織物やの心中一チ夜づけ夏紅葉血汐紅といふあかいづくしの外題を出し入りを取七月かハりハ業平東下向大入其跡ハくりかへしもの其霜月大坂へ歸り豐竹より角芝居を取立中山文七座本にて稀藤原系圖の顏見世狂言を出し文七川太郎に成大吉とかけ合の口合せりふ大キに人をよろこバせ板にほりて町中を賣たる事隱れなしそのうへ故中村喜代三郎江戶より登りて受よく二のかハりハ三十石艘始古今の大々當り文七故大五郎始ての出合はなゝしく大切に砂ふたい共一面の廻り道具を工夫し芝居ハ極月上旬より下屋をほりての大仕かけ法善寺床の前なるたら〳〵おり又濱千日角のたら〳〵おり迄皆此士にて平地となし破風口の大臣柱を取置に差圖して序の御殿の引道具切の淀の大廻りハ誰しも舌を巻たる手段此時も銀主大キにたんのふして其跡くりかへしの信仰記夏替りに錢屋の噂を持込で伊勢や日向の物がたりめづらしき地獄のせりふに　腹をよぢらせ八朔からが大坂神事揃文七故大五郎の取合よく無筆の女房が書置を稚子におほへさせ死後にいわせる趣向あ

たらしくうれい見物によくこたへこつずいの涙を流させ九月より大吉故喜代三が暇乞是又評よく卯の霜月よりやはり文七座本にて中村富十郎市川升藏江戸より登り顔見世ハ福源氏壽之巻大入にて二のかハり九州鈎鐘岬の狂言文七鯨突灘八にて鐵炮をひらい耳をふさぐ幕にて氣をとり升藏が死骸の腹なるがんかうの印を取出す趣合おもしろく大切にハ富十郎娘道成寺の所作事つゞいてぶたいを破風ともに東西へ引わけ山門を突出し故大五郎文七たての内よりせり上て目を驚かせしに辰の年正月十日頃迄ハさのミ入もなかりしか十二三日頃より大入ゥして後にハぶたいに棧敷をかける程の大當り尤富十郎久しぶりの所作事ゆへとは云ながら狂言わるくてハ中〳〵もてる物にあらず正三手がらハいふも更なり四月ノ頃迄大入ゥしてあと富十郎吉三金作お七にて戀の緋櫻のくりかへし七月替ゥハ樂屋より注文有て江戸風の曾我の狂言これはおもわしからず八月より戀女房のくりかへし大キによく顔見世まへ迄つゞき霜月も又文七座生如來金顔見世大ていにて二のかハり急に出來かねゝ〳〵巳の正月十五日より霧太郎天狗酒醜の狂言是も大キにあたり切に惣二階座敷の引道具後にハ舞臺を突出して又大まハり道具かれこれ此場ハ道具うごきづめにして富十郎彦四郎道行も請よく故新九郎きり太郎の仕内に我おらせたるも此人の遣ひ方著作に秀でし故の事也其砌居宅ハ吉左衞門町にて親正兵衞に孝心深く此夏剃髪して法名正朔といふ隱居の座敷をふつらい又ハ二階へ庭をつきうへ込飛石などを置井戸をすへて下の板本の窓とし釣瓶をおろせバ酒肴たばこ盆までくミ上る樣に仕かけ料理茶屋を企て活氣なる親の心をいさめ芝居の銀主をすゝめて夏祭の折からハ役者中をねり物に出させ所を賑ハし其七月より富十郎くずのは又は文七故大五郎二人の奴見事なりとてます〳〵大入秋の末江戸より市村龜藏上方見物に來りしを賴ミスケさせおはつ德兵衞富十郎と出合にて切

ハ龜藏所作事あまりたきらず其跡もくりかへし物寶曆十一年巳ノ霜月同文七座惣追補使鎌倉鑑にハ故新九郎を顔見世より謀反人ンに遣ひ二のかハりハ泰平いろは行烈中村吉右衞門故十藏事なり由良之助にて忠臣藏の作りかへ次の女鳴髪にハひつぱら艸をくらひて人間ンと馬と成おかしミ七月にハ竹篦太郎怪談記不けいきにて次に國性爺のくりかへし切が板屋ばし噂の一チ夜づけを大經寺に取直せし此仕組の評判よく跡ハくりかへしものにて午の霜月京都へ登り顔見世ハ川太郎のくりかへし二のかハりハけいせい花城山七人の片袖を一チ度に引ちぎる序の幕よろしく狂言も花やかに大入ゥしてそれよりハ大坂の古物をくりかへして餘り新物聞及バず癸未のとし子分ンの松之丞を座本にして顔見世源平通寶丸二のかハりに所作事させ則けいせい熊野山の狂言大キにあたり跡ハ又くりかへしもの或ハ敵討仙臺詰などにて入を取申の霜月ハ尾上紋太郎座其後祇園林の心ンの一チ夜づけより松之丞病氣にとりかゝり程なく死去せしより大坂へ立歸り酉の正月より竹田芝居へ出ておどけ狂言曾我鬼扈悪方果報とて七福神と矢の根五郎の出合に腹をかゝへさせ外にけいせい十三鐘隣取二代鑑の三切ゥ物故三升他人巳之助の立合イの引ぱりよく酉の七月にハ恠浦嶋天上返のおどけ狂言そんてんぴるのせりふをはやらせ外にハ小栗と月山の肝取いづれも故他人巳之助の仕内に合より趣向を立て出來させ同年ンハ月竹本芝居にて投頭巾北濱育といふ淨瑠理の外題出しかどさハり有てかんばんを引急に新淨留利の取組を賴まれ正三永介其外の淨留利作者打込に相談して姻袖鏡を拵へともゝ〳〵書立達者をあらハし同年霜月中芝居にて二座本　中村哥右衞門　故三升大五郎隔晩の顔見世の内三枡座の方にて妻ゐのだ妻の狂言を當それよりハくりかへし物數々出て北へも行戊ノ四月より惟喬親王魔術冠を出し是二座打込に成ゥ道具も大形にて大てい七月より男作後日帷五郎八と瀧川の行

末を故吉右衛門小六にてうれいの仕組評判よくそれより又古物出て戌の霜月より角の芝居雛助座へ住ミ往古大坂村在所由来此顔見世大當り其次ハ合の物亥ノ年春の二のかハり世話料理鰻庖丁看板出るから噂よく初日二日目ハ大入人の山をなせしがさハり有て相やめそれより義經蝦夷語を出しけれ共つゞかず芝居も有なしにて漸〳〵八月より大坂日記鹽の長次郎をいだし十月にハ竹本へスケに出て石川五右衛門一代噺を出し是先年かんばん出せし七條川原入也　亥ノ年霜月角にて中山來助座の顔見世男女相生鑑座付の跡にて縁引の役割定けいきよく合の物千本櫻故芳澤あやめ　はじめの名崎之助是忠信の受よく明和五子年春ハ京都中山文七より頼まれスケに登り二のかハりけいせい桃山錦を出し秋ハ大坂へ下り竹田芝居にて宿無團七時雨傘　其頃の噂いわ井風呂の一夜づけ尤大入九月に龜谷濱芝居跡にて　相合橋南つめ東へ入ル所ニ有し也　淨留利操を取立子分ン正吉名前にて連管三番叟壽館狐馬懸姿競唐土噺關取二代勝負附其外古物合して六切の淨留利を出し太夫三弦操り方の一座をかゝへそれのミならず芝居の向ひへ新宅の茶屋を組立妻に勝手をはからハせ二階座敷に又々うへ込中庭掃へ大キに端手なる仕かけ成しがたもちがたく芝居とともにたちぎへして丑とし夏より思ひ立菱屋といへるに内談して座摩の一座を阿波へ引こさせ其身も弟分ン三勝　今の新平也　其外昵近の者引ツ連て阿州へ立越看板に大坂哥舞妓芝居惣頭取と英名をあげ又々故來助雛介其外の役者を呼下し秋の末に立歸りそれより父が吉左衛門町に居て丑の暮より角芝居にて富士松山十郎　今ハ三保木儀左衛門也　座を取立顔見世遅けれバ納めの庚申待と外題して暫くはしめ寅の二月上旬より二のかハり阿波土産の心ニて東山殿女狩大キに町中評判して夏迄つゞき其跡正徳年中淀屋橋喧嘩を出し此時分より難波へ引こもり居て富士松座の七月に夕涼蚊追店とて夏衣裳の座付をさせ同霜月より中の芝居小川吉太郎座へ行眞一文

字魁評判の顔見世難波にてのおもいつき骨つぎのおかしミあたりそれより又布袋町へ宅替して小川座二のかハりが桑名屋徳藏入船物語切に面影六哥仙とて故中村粂太郎所作事迄古今にすぐれ入つめ跡ハ追々くりかへし物卯霜月ハやはり中にて市山助五郎座顔見世中睦妖龍宮嶋臺哥右衛門猩々の役これもおかしく二のかハり三千世界商往來三月末より近江源氏躰講釋皆々大當りにて辰の秋頃より正三胸痛ミの病症時々おこりけれ共たじろかずまへ廣に江戸表へ人をつかハし來ル顔見世に故尾上菊五郎の相談成よし通達有て中の芝居へ中村歌右衛門名前を上故菊五郎前かんばん出せし所俄にへんがへ故かゝりの者共大キに廢亡し術計盡たるに病中ながらちつ共ひるまず頓智の外題をおもひ付尾上菊五郎不登噺と顔見世狂言のかんはんを出し坂田半五郎を呼よせ出來にくき難義の所をわかやがし思ひの外大入して合の物新うすゆきも相應に入たる内胸痛日々に增長し此比ハ腹中にてやぶれ鼓を打ごとき音を出し昵近の内に醫心有ル　輩　もあれバ養生に如才なく病氣の内にも二のかハり狂言に心をつかへバ次第に重るといふ辻もかるふハならず時々ハ堺の醫家へ導引の療治にかよひ打臥とハなしにぶら〳〵せし内漸二のかハりの時候世界をおもひよりそれから日もつまりあればせり付て三ツ目四ツ目を相定め序二ツ目もあらかたにきハまりし時惟安永二年癸巳二月十六日いつにかハりて甚病氣こゝろよしとて昵近の者をよせ四方山の咄しの内にうかゝしや日本第一和布刈神事と外題をゐたゝめ脇付迄もこま〳〵と書付病氣もいとハず座本中村哥右衛門方へ持行けれども折ふし富市方にて　道頓ほり名代の　りやうり茶や也　御屋敷方の振舞の座へ立チ越しと留主の樣子を聞明日迄も延されぬ急成家業づくなれバ杖にすがり富市のかつてへ行　是使にても事濟べき内談なれハ直　なれ共大事の外題の哥右衛門を呼出し密に外題を見せたりしに大キに氣に入けれバ看板あつらへの手つがいまで其座にゆきしなり

にて内談しこゝろよげに立歸り寢たりしが其夜八ツ時分に俄に心痛取詰たりしや妻をおこして水を乞によりうちおどろきて親正朔七三郎共に三勝元服して七三郎後ニ新平と改名近ン所の知音へしらせし内いせや又右衞門大村屋九八中村哥右衞門市山助五郎皆々多年の親友なれバ早速かけ付醫師もかれこれ其外昵近の輩迄思ひ〳〵に介抱すれ共相叶わずさのミくつうのてい共見へず大喝一聲南無三寶と一句を殘しねむるがごとく息たへ畢ぬアヽ此夜いかなる時ぞや凡三十年來道頓堀京都に及んて狂言戯作の譽たかく一生の述作七十餘ばん其外濱中ゥ芝居の作文又ハ一夜づけ顔見世など數多ければもれもやすらん剩京都の出勤伊勢鄙のさき〴〵にも急成かハりに望んでハ見捨る事なく筆作に助られし端本なども多かンめれど是を記すにいとまあらずことばの花筆の林のしげ〳〵成竝木の主も痰火のせり上にせまりふさぎしまぶたも廻り道具と目くるめき四十四歳の春秋におしまれ一期の夢の幕をさらりと引とりしかバこれをつたへ聞役者ハもとよりかの遮羅雙林に佛をうしのふ涅槃會より閒もなければ女がたも立役も羅漢のごとく取まハし天のたすけの藥ハふれども中のりしかけの針かねに引かゝりて此座にいたらす釣かんばんの人形も俄雨にあふたるごとく木戸手代場廻りハ極樂の通り切手をさゝげ半疊うりハ蓮臺の丈夫なをぎんミし世を宇治山のうり子どもミづからをけまんにむすんでもちはこび日頃大入大あたりをさせられし恩どくをしたひし月日も立やすくむかしを乞ふるおもかげハ法善寺の石碑に朽ざる机唯おしむべし〳〵

緒を斷て手向とせはやいとさくら

旹

天明乙巳年二月十七日

安永三　甲午　百六十年　〔編者曰ク原本ニハ『百六十年』ノ四字朱書〕

一

一　當春　網島大長寺開長

當寺にて紙治小春の書置を諸人に見せ板行に模寫して出ス　追善狂歌二首　大長寺當住　進譽

皆人の南無あミ島の手向艸帋や佛の緣に引れて

十月の小春のむかし思ひ出てミな心中に回向あれかし

一　六月廿三日　京大坂大風　川口邊の船多ク損シ民家倒レ一千貳百人餘溺死ス

一　當春　角之芝居二の替り狂言指留メ

小川吉太郎座正月廿三日初日にて

大智の榮花ハ
どつといふて
契情の
夜るの道中

遠目鏡九州細見

此狂言は其頃　紀州樣我儘ニ而交代の旅中夜分ニ通行有之し故契情のよるの道中といふ事　公邊より御差構ひ被仰付五日目ニ相止ム

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　四月九日　薩州御姫君角之芝居御見物西さんしき上下不殘御簾かゝり　東桟敷場は町方見物
御所望ニ依て今日一日左之狂言差加ル

壽凱陣紅葉　一册物

一惟茂文七　一唐琴姫　國太郎
一柏木左衛門　三十郎　一軍藤太　治郎三
一妬てりは　甚吉　取手やく　文五郎　卯八　幾藏

一　同月　同座ニ而淺尾爲十郎のべの書殘ちよんがれ初て勤メ大當り

一　七月　頭取　相撲興行　勧進元　陳幕長兵衛

勧進相撲は一代一度之大望ニ而互に心を合セ繁昌致ゝ樣ニ隨分出情(精)可仕處既ニ安永二年巳迄年々打續勧進元利分無之故同年十二月　御番所ニ於て勧進相撲興行之御印御闕取頂戴之日角力取壹人も不罷出ニ付大きニ御呵りを蒙り無據頭取八人斗御闕頂戴仕翌年安永三年陣幕長兵衛勧進元名前ニ而頭取仲間にて興行致ス又々後年ニ及て箇樣之義出來いたてハ勧進相撲退轉致シゝ半間相撲一件の銘々篤と相考へ勧進元之利分ニ相成ゝ樣取計ひ可致とて是迄八人の頭取之所當午年より六人相加り以上十四人ニ相成ゝ

岩船門平　陣幕長兵衛　湊　又七　朝日山四郎右衛門
竹繩半右衛門　小野川才助　御所櫻長兵衛　若狹山加右衛門
枝川藤兵衛　押尾川卷右衛門　種ヶ島吉平　時津風彌吉

岩友新七　八劍忠七

以來は無據筋合有之ゝ共一人も差加へ申間敷ゝ昔は頭取四五人ニて相勤ゝ處近年段々人數相增ては當時之頭取不器量ニ而角力一件不取締故と世上之そしりを受ては角力一統之恥辱也若又頭取無人數ニ相成ゝハヽ、其節頭取中評定之上多分之沙汰ニ任セ相撲興行中は勿論平日迚も不勤之義あらバ頭取仲間をハ相省キ幷兵附甲乙給銀增減惣頭取相談之うへ多分ニ可申事　大坂頭取後年ニ加りし名前左之通

藤島森右衛門　鷲ヶ峯太平次　三保關梶右衛門　劒石繁右衛門
石ヶ濱新次郎　猪名川政右衛門　岩ヶ濱清兵衛　生島彌吉郎
揚羽清七　草摺彌三郎　島ヶ崎七兵衛　外ヶ濱浪右衛門
千田川吉兵衛　三芳野藤吉　藤島岩右衛門　吳羽清吉
荒嶋德右衛門　高崎市右衛門　開瀨垣辰右衛門　花湊鶴之介
江戸ヶ崎利右衛門

一　道頓堀ニ而　曲屁福平

一　五月廿八日　難波新地福富の藝子上町邊の息子と心中
同六月六日より中の芝居嵐座ニ而一夜付ヶ狂言
突殺(ヒトナモイ)噂の廿八(ツキスヱ)夜

安永四　乙未

一

一　八月十三日　河州志紀郡柏原村に水仙花咲けるを東御門跡へ差上しに御門主より同十四日仙洞御所へ御進獻なされ御和歌の御會あり

御製

冬たにも梅より後に咲花をまた初秋の半にそ見る
又類ひ波を凌る仙人にあひあふけふや千代の初秋

一　正月十七日　土佐堀心中

長堀邊河内屋六三郎といふ男島之内大村屋絲といふ歌妓と相對死　同月廿五日より中之芝居嵐松次郎座ニて切狂言とす

おふさ　徳兵衛　粂十相合傘　道行思ひの雪解十藏粂介つとむ

一　三月　中山新九郎死

法號

一　三月十日より　豐竹嶋太夫一世一代

豐竹和哥三芝居ニ而菅原を勤ム此後和哥三座斷絶ス

一　三月　道頓堀見世物

馬男　蘇鐵男　大蛙

一　五月上旬　異魚

兵庫浦より惣身鮫如岩魚を獵ス名を知る人なし　目方三百貫目餘　脊鰭五尺　下ノ鰭四尺餘　長サ一丈餘　目八寸　口二寸

一　八月　大坂勸進相撲定書　別卷ニ有

一　當冬　花王連中開發

船場御堂の邊藤屋喜介といふ人魁首也

一　同　濱芝居ニ而五段續狂言初ム

一　同　宮地芝居ニ宵顔見せ初ム

一　豐竹鐘太夫死

一　十二月　河州道明寺菅公廟碑建

京師　北海先生撰

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

安永五 丙申

一

一 正月より二月に至り諸國疫病はやる京大坂には風の神の像を拵へて川々へ送ル

一 三月 諸國はしかはやる

一 七月 大坂市中大踊

一 八月廿八日 貸付錢の御觸書

玉造下清水町兵庫屋熊次郎住吉屋町木屋茂兵衛貸家京屋甚右衛門義大坂三郷町中幷近在へ錢五貫文を九十日限り定メ貸付返濟之義は三十日毎ニ壹貫六百六十四文ツヽ三度ニ受取都合五貫貳百卅七文ニ而一ケ月ニ付利足廿三文之内十五文貸方利足三文は御入料五文は會所致諸入用住吉町に會所建錢小貸致度旨先達而相願ヰニ付右之通差免ヰ間相對ヲ以借請可申ヰ

一 十二月廿五日 北濱心中

一 五月 大相撲 勸進元 小野川才助 達ヶ關事 谷風梶之助
今年 東ノ方 小結

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　四月　若女形嵐小六一世一代
中之芝居三升松之座ニ而嫗山姥勤ム　六十七歳

一　豐竹綱太夫死

一　四月　高坊主　身長六尺八寸
中國長門の出生盲目ニ而琵琶を彈キ歩行今年四月の初メ國を出て伊勢參宮の志願あり生國ニては荒神祓ニこの琵琶を彈て生業となすよし依之念持佛國よりの送り手形路銀を貯へ出しに道中にて盜賊の爲に不殘奪ハれ漸大坂迄來りて長州御屋敷へ右之趣相屆ケ夫より六月下旬まで大坂市中または堺の津を琵琶を彈て勸化す其後參宮致シ四十餘日を經て下向ニ及ひ亦々大坂市中殘りの町々を勸化ス見る人希有の高入道也といへり

一　七月　萬年龜
天滿天神社内ニ而見せる誠ニ畫がことき見事なる大龜也

一　瘟疹氣候錄　小本出板

自序

換物移歲考歷幾於春秋到今歲三伏后瘟疹專流行於是近來隔二十三年而有疹是非常病疾也因茲爲醫者誤多矣仍傳所子家書案書以述其要是之人必以其私意勿自令方劑治案寔哉有醫意而三世功固精而尤精也蓋是歲因有所候節氣温冷歌今曉之而題瘟疹案錄故人考其遺辨以用則此書亦一助

乎

安永三甲午夏麥生自序

瘟疹氣候錄　藤拙叟述

夫聖人之精畫卦以示而聖人之精蘊不可因卦而發也雖然卦不畫則聖人之精不可得見微卦聖人之蘊殆不可得委聞也易者其天地鬼神之奧乎是唯考るに去ル明和七寅ノ年七月廿八日暮過より夜四ツ半時まで暉氣立更ニ何の方にか火事燒凶あること
くにして何方よりも北の方に當りて是を見る
此品予案するに去ル寅ノ年運四ノ氣陽明燥金ニして是今年夏中雨降らず暑一扁にして北方水の氣地ニ入り土中迄乾きて秋金ノ近つくに隨ひ一時に集り責升ル所也こゝに於て見るに右七月廿八日は壬申ノ日金性の五行也金申ノ金とかさぬ來ル八月二日秋今ノ節也各合體して土中ニ含ム酉金この時ニ至り發ス玄氷離中斷南火一にして地氣相戰ひて如斯逆するか
右品ニ轉して風疫專ら流行して甚た患ふへし風疫漸々に靜まらんとする頃より其餘氣に傳ハりて瘟疹ニ來ル其時の要用左ニ記ス
右ノ映氣より流轉して今ノ瘟疹ニ來ル時ハ今未年運氣大陰濕土四ノ氣少陰相火ノ頃よりそろ〳〵來り次第ニ流行ニ及ぶ歟　私ニ案るに今年ノ筮ニ顯るゝ處水地此卦を知ル依て予先ツ五畿七道の國より疹發り來ル哉來テ后來ル申ノ年運氣三四ノ運ニ從ひ其鬼神も去り誠ニ泰平ニ安らかなるべし

案るニ巳午未此三ヶ年運氣能ク轉動順純ニ治りこれニ依て來申ノ三月中旬ノ頃鬼神の氣方ニ治りぬる時其以前乾坤是また如何未詳して殘ス

此時映氣を受ル所より小兒ノ痘瘡となる去秋ノ末より春ニ至り專ら流行ス且亦裏ニ受ル痘重クして治シ難からん表ニ得ル者は容易ク整て輕し爰ニまた去秋已來今年ニ至て西雄金位焦るゝ氣味にて大方昏ル頃西方ニ赤く南風來てこれを招く故ニ春草夏菜水菓子も各其氣育て膏脂薄シ眞ニ令熟和淡味ノ者鮮からん近來都鄙ともに市中賣物は彼是誤れる品多し誠ニ古語ニ不節不喰といふこと今思ひ合する事あり獨活三葉芹無盡草夏蘿蔔此ノ外菜菓ニ至るまて皆如斯ニして自然の天氣を未タ得ずして熟味となる事無きものは多く是皆自生育ニ非ル所は濕邪を已れと帶ぶこゝを以て見るニ近年貴賤ともに浮腫を病ム人あり多くは是より傳ふる所なる歟

去夏秋より後旱天にて地味ニ保たさるは雨露ニして養たるものは干土直ニ膏脂故ニ其味可踈樣にして可喰惣して亦近年は農父も其時節ソ不斗私ニ育て蒸暖めて作り出ス者あり此理は醫たる人能ク勘辨あらん今卯年四ノ氣頃縮及ヒ始メ疫邪ノ類ニ襲ハれ或ハ痘瘡流行せんや

予案するニ今年ハ水運不及ニて四氣太陽寒水は月中十三日秋分ノ頃より痘瘡來んや卯年ノ冬より其氣殘りて翌辰年季秋ノ比より續て巳ノ年ニ至て初ハ風疫のことし其後凡世上一偏ニ疫邪となり各難症ニして死する輩多し是皆抑寅年ノ炎暉より發して其邪を裏ニ含んて如斯ノ一偏ノ疫疾を惱ムものと存ス此理後學ノ人ノ是非判斷を聞んや否や

此案愚老今七旬有餘也かゝる閒ニ先實永ノ頃獺瘧瘡流行ス是時予幼稚ニして不知其ノ是非ふかれ共亡父ノ書キ殘ス所を求ム其後享保十五戌ノ年又寶曆三酉年夏ノ頃はやる事あり此時ハ九州より上方へ至ル然れ共眞ノ獺瘧にもあらず隱瘧ノ變症也右大概形容は同樣ニて病根ハ各別也三ヶ度共ニ何れも一ツならずして治方も別シ今年將來疫ハ全ク去年ノ炎暑より發ス猶又治方はなハた別あり聊も診事なからん誠ニ壽ある者も庸醫ノ爲ニ害セらる殊更他病とは違ひ朝夕見及ぶ疾ニあらざれハ胗症相容も如何ならん假令ひ方書を便としこれを用ゆる共暗夜ニ礫を放チ何を的とするや抑三世ノ醫年老を積ミ功有こと其病根濫觴を革るにふかんや

扨又發與ニ其熱ノ輕重あり亦更ニ熱ノなき疹もあり疹出集つて有り熱も多し或ハ小水閉て强熱ノもの必ス難症にして治方手早きもの也恐れて早く良保せんや始めニ瘧ノことくのもの或は隔て震ひ亦熱盛にして來ルもの其獺疹多くして重シ亦寒ノ多クして是あるものあり此外異症ニ見えて手を取もの多からん別して今般ノ疹如此にして諸醫古方ニ思ひ合せて治要する共其間違ひ多からんよく工夫可有之也且又痘ノ初劑瘧と見て裁り藥を用ゆべからず中暑には傷寒ノ劑を施シ下スこと勿レ必ス我慢を退ケ實ニ愼て醫案シ兼て累日たしなミ可有もの歟

古論ニ曰獺ハ疹出て麻ノ枝を成がことし疹出て六腑陽ニ屬シ氣を主ル夫レ疹ハ肉を忌ム實ニ唯毒を解シ火を散する也只初は熱を發せんが爲に熱を表に趣セ疹出ノ後ハ宜ク陰を補ふて以て陽を製すべし左これなき時ハ疹甚しき時ハ陰分其贅熱をうけて虛耗多し故ニ治方清火滋陰を以て主として少も其ノ氣を動すべか

らざる也所以ニ人參白朮半夏ノ類若燥稈ノ劑ハ首尾當忌なり世ニ知痘證所繁之重而不知疹于人左甚方書多く忽而不備良可太息也　予案るニ瘟ノ字ノ事病症ニ隨ヒ瘟ト斗りニ心得るは非也抑此字ノ理アサの實ニあらず先大痲風痲等といふ所もあり今瘟疹ことく字典は韻瑞等ニ隨ひ見るノ理あり

元祿四年頃や其後寶永四五年ニ有て享保十五年此間廿三年を隔ッ其後寶曆三年此間凡ソ右同樣隔夫より近年ニ及んては今頃凡廿三年ノ年廻を經んやまた由あるべき歟

瘟疹來んと欲するに能ク此ノ病を除ク方　瘟疹沙汰し近町隣家までも來ル時これを薰てよく退ル珍方神藥也

蒼朮　細草　乳香　降眞　川芎　各等分

右劑薰於家屋

加味升痲湯

升痲　玄參　各二文目　川原柴胡　黃連　各一文目　乾葛　赤芍　獨活　各八分　甘艸　少

右水煎服

家傳方　仰冤金烏丸これを服して能ク痘疹共ニ除ク　御望ノ方ハ江戶兩國橫網町世木平吉方ニ有之

家方　痲ノ葉を採りて雷鉢ニて鹽を少シ入レ擂リ水ニ和して沐ス若冬ニ至り生苧これなき時は肆店にて賣ル苧ノ把ね結びし苧を把ねながら煎し洗ふ尤生姜ノ葉を入るゝもあり亦茗荷ノ葉をも入る右乾苧結苧を買ふ時岡路ノ痲ニ付たるといふべし是細苧也根苧ハあしゝ田ニ作るを田苧といひ畑山開なとに植るを岡路と

いふ又根苧珠苧といふ所も右ノ理也

家傳薰方

薰陸　雌黃　鬱金　茵陳　神代松節

右各等分細末ニシテ蜜ニ煉リ鹽ヲ少シ入レ色々ト合セタクヘシ至テ能ク邪を避く也　此外除藥數多あれ共不得なるは不記

和漢共ニ其發表ニ升痲葛根湯を用ひ來ル然レ共今般發劑用べからず相應とせず

防風通聖散

此方古來ハ疹ノ後ニ用ル方多し然レ共今般ノ疹始メに用ふ太タ効あり

防風　川芎　當皈　白芍　蒲萊　各一文目　黃芩　白朮　桔梗　木丹　各六分　天花　連翹　薄可　荊芥　滑石　各三分　甘艸　少

右水煎服

熱ありて寒を添るには紫蘇を加ふ山城ヲ用　痰強きは竹葉を加ふ痰乾キ強テ出兼ルには生地黃を加ふ熱ゆるく來り發シ兼ルは勢ひ來らず陳皮を加ふ痰を催するには白茯苓を加ふ小火裏ニありと見るには木通を加ふ火盛にして色變することあらバ黃連を加ふ亦色紫燥照には連翹を倍して用ゆ

加味四物湯

當皈　黃芩　白芍　生地黃　陳皮　麥門　牡丹

右色紫燥ニ及ハヽ此ノ四物湯ニていかにも治する也二便共ニ閉なハ黄柏。黄連を加ふ小便強ク閉なハ木通。地膚子。車前子を其上ニ加へ黄連を去ル痰強キには貝母。瓜蔞仁を加ふ何れよりも血來ルには犀角を加ふ亦一角ヲ用フキ詭語煩亂ヘシなるには石膏ノッカヒ方甚タ祕アリムサトツカフベカラズ石膏ルコトモアリ古方ニ專也トイエトモ今般ハ決シテ不相應也　知母。黄柏。黄連を以て止めよろかあれ共未タ止ざるには連翹。木通を以て全クこれを止ムべし痰盛んに内を攻ルには芥子荊芥(ケイカイ)。犀角を用ふ熱盛んにして衣を捨て搔キ走り狂亂するには

苦參　龍膽　知母　黄柏

右ニ加へ用ふ速に鎭ルべき也亦日數五六日も過て如此症あらバ

連翹　黄芩　木丹　黄連　升麻　葛根　芍藥　木通　知母　竹葉　錦文大黄　甘草　少

右十二味を水煎して頻りニ用ふべし

蘇解散

紫蘇　山城大　乾葛　大　防風　大　浮萍　炒大　白芷　中　蟬退　小　升麻　小　木通　小　大力子　小　甘草　少

右水煎服

右ノ方熱ノ後または熱ノ中ニても腰痛し足重ク吐ノ氣味または腹痛頭痛ニても專らこれを用てよし

連日不食または吐ノ氣味あるには

粳米　一七　青皮　枳殼　黄土　水飛各等分

右水煎ニて用ふ

或は蟲を吐キ黄水を吐には烏梅。山査子。山栀(ダ)。各等分ニし別ニ煎シ右ノ藥と兼用てよし

一方加味四物湯

生地黄　犀角　茜陳　青黛　木通　升麻　黄柏　糯米(ダ)　朱　少シイル但シ煎シ終テ用ユル時コレヲイル

右八味水煎ニてこれを疹熱よりして齒痛喉腫(ノンドハレ)病をなすものニ用ふ

人參飲

風寒を强ク帶ひ咳嗽(ガイソウ)來り虛分なる人にはいづれの症にても用べし

紫蘇　山城　陳皮　半夏　茯苓　乾葛　桔梗　各一攵目　甘草　少

右病强キ人には虛分なる人ほど人參を見合て加ふ大概は不入(レ)して用ふ熱往來あるには前胡を加ふまた保赤全書には山査子。麻黄を加ふれとも是は去テ宜シ本方ニ痰强キには半夏。前胡。桔梗。陳皮。茯苓を倍して用ふいかにも宜シ

犀角地黄湯

此方劑は發序ニ熱を含ミ痲ノ乾キ來ニ必ス用ふべし血氣ノ燒を止ム

紫蘇　山城　葛根　生地黄　犀角　各大　浮萍　兜鈴　黄芩　知母　中小　陳皮　甘草　少

右水煎服

右ニ石膏を加ふるもあり去テよしまた麥門冬。玄參を加もあり

班疹敗毒散

班疹いでゝ未タ映ぜず寒熱して頭痛盛んに身節疼痛する者ニ用ふ　醫統

獨活　紫蘇　山城　前胡　大　桔梗　川芎　白茯　中　梹榔　小　甘草　少

右ノ方ニ參を入れて用ふ志かし參を去り萎蕤を代りニ用ふ二三日も不食ノ者には白米一匕を入レ水煎ス此藥發熱より甚しうして未タ點見へざるに彼是他藥を用ふるといへども其効なきに此藥を與ふべし左小兒大小ニよりて其辨へ有べきもの歟

蘇葛湯

紫蘇　山州　葛根　白芍　陳皮　砂仁　各等分　甘草　少

右醫鑑ニ發表劑也水煎服ス

防風解毒湯

痲疹發熱ノとき疹と見付なハこれを用ふべし良方也

防風　薄苛　荊芥　右大　知母　桔梗　大力子　各中　連翹　木通　梹榔　竹葉　各小　甘艸　少

右精力强キ人には石膏。枳殼を加へ薄キ人には必ス除くべし

黃連解毒湯

連翹　黃柏　木丹　各大　大力子　荊芥　知母　各中　石膏　桔梗　玄參　各小　木通　見合　甘艸　少

治痲出んとして色紅紫ニ乾キ燥暗晦ノ火盛んニ毒熾ス急ニ六一散を以テこれを解ニ未タ去ラズ仍テ地黃。紅花。黃芩この三味を左ニ合セ用ふ大ニ効あり

甘桔湯　保赤全書

疹ノ出るを治せんと欲するニ咽喉腫痛ム者かならず飯を食ふことあたハず是レ火毒也鬱熱を拂ふに此方よろし尤水煎服する也

甘草　五分　桔梗　玄參　大力子　各二分　麥門冬　一文目

利明湯　解毒湯トモイフ保赤全書ニモ出ツ

山豆根　麥門冬　一文目　大力子　七分　玄參　同　桔梗　同　防風　五分　甘草　一分

右細末にして切レニ包ミ含ム

右來ルこと急也亦息ヲ閉塞シ命ニかゝる太タむつかしき大事也殊更ニ多キもの也指ノ高陽穴より針を以て血を出ス左此方ノ手を以て其血を絞り出ス血出れハ恙なし誠ニ神ノ妙也兼て心掛あるべし

加味四物湯

治疹已ニ出て三日を過て沒することあたハさるものハ內ニ虛熱あり如此ノ本法ニよる

萎蕤　大　牡丹皮　中　玄參　小　犀角　小一角ナラハ猶以ヨロシ　升麻小　右水煎

亦一方ニ失血として此方ヲ用ひ大ニ効あり

生地黃　大　犀角　中　木通　中　茵陳　小　升麻　小　青皮　小　黃柏　黑炒少　右水煎用てよし

東井翁曰食傷亦ハ生物冷物麵ノ類にしていづれも見え分らず疹も未タ見え分らざるにハ不換金正氣散ニ山查子。神曲ヲ加へ亦ハ砂仁ニ米ヲ入レ煎服して吉

熱ありて瀉強キ入には錢氏白朮散を用來て家傳とす亦吐瀉ともに有ニは藿香正氣散を用てよし

和中湯

痢ヲ兼ル疹ニ水煎服ス

藿香　紫蘇　香附子　蒼朮　厚朴　山査子　川芎　各六分　羌活　砂仁　青皮カ　白芷　陳皮　各四分

甘草一分

一方和中湯

青皮　厚朴　枳殼　藿香　各中　白朮　蒼朮　各大　砂仁　小　芍藥　中

右延壽院殿要藥ノ由今ニ施して傳來シ疹前後共ニ用ふ別して三更五更ニ咳嗽ニは宜しきと也亦不換金ニ紫蘇を炒加ルも其効ありと也

疹痘ニより舌痘あり亦ハ舌烈（ハゲシキ）もあり家方錢氏白朮散ニ金銀花を加へて世々其効あり尤故（モトノ）古林先生傳方又千金方ニ蒲黃塗（ヌル）極妙也烏賊骨炒少加ル方もあり雌黃

右二味細末ニしてつくる卽効あり

疹後ノ腫浮クことあるもの也家傳ニ此藥を用來りて毎度其効を得たり仍テ今こゝにこれを記ス　醫鑑ニ此類方を出ス

橘皮　猪苓　澤瀉　茯苓　白朮　各一文目　木瓜　厚朴　神曲　檳榔　各七文目　香附子　八分

腹ノ皮　六分　蒼朮　一文目　甘草　三分

右水流ノ水を用て煎服ス

疹後耳より膿水を出シ或ハ痛ミ至て痒（カユ）きもの多しこれ元來内には風熱外ニは水濕ある故也これには左ノ方宜シ

清黃湯　準繩ニ出

防風　滑石　各五分　木丹　酒製　三分　藿香　黃連　各二分　五厘　紫蘇　山州　三分　甘草　一分　五厘

右細末ニして白湯ニて用ふまた煎湯ニても宜シ

家方牛井故春子ノ一書ニ云ク瘡疹その熱ニ取巻レ吐蚘シ心持治せざる也

茯苓　砂仁　薏苡　枇杷葉　桑白皮　各二文目　沈香　杜仲　大腹皮　陳皮　一文目三分　石斛　酒炒　一文目

神曲　檳榔　白豆　各八分　丁子　白朮　各六分　甘草　一分　五味子　七分　青皮　五分　藿香　三分五厘

右嘉朱散より出ル處弱キ人には人參入レ用てよし

疹後聾となりしには錢氏白朮散を用ていかにもよく耳を通する也又同外治ニ蚯蚓（ミヽジノクソ）土をとり麝香を少入レ毎（クダ）管（コト）ニ末。入强ク耳ニ吹いれて甚妙あり其後ハ香油を以て指入るゝ也

疹後ニ口閉チ啞言ニ成たるには醫學綱目ニ易水先生ノ方を出ス

防已　大　地骨皮　中　黃芪　中　枳殼　中　白芍　小　荊芥　大力子　小

右水煎服

疹后浮腫小便不來不通ニ藿香正氣散ニ赤小豆を加へて服ス必よろし

加減胃苓湯

陳皮　猪苓　澤瀉　木瓜　白朮　厚朴　山査子　砂仁　各七分　蒼朮　甘草　三分

右半井先生ノ傳ニて醫鑑にもまたこれを出ス燈心十根入テ水煎して用ふ浮腫を能引也

清金散　壽世保元

黄芩　玄參　貝母　麥門冬　天花　黄連　桔梗　白芍　各等分　甘草　少

右疹后聲啞不出或ハ咳嗽喘して苦しむ者これを水煎服すれハ能これを治ス

加味四物湯

妊娠出疹これを療するニ本方ニ升麻。黄芩。黄連。砂仁を加へて水煎服ス右胎氣急ニミゆる時ハ苧麻根。枳殻。艾葉を加へ甘草をも少シ加へて服ス

疹后食すゝまざる者には四物湯ニ神曲。砂仁。陳皮。升麻。麥門冬を入て水煎服すれハ能食をすゝむ妙方也

治疹已ニ出テ三兩日を過て沒することあたハざるものは内虚ニ熱あるニ仍て也前ニ出ス所ノ加味四物湯にて至極ノ妙方也

疹　案　例

古書ニ曰疹子ノ云日數七日にして熱ふりぞき疹をのづから沒して自解するこれ定數也これを矩スルニ五日六日ノ兩日以テ重シとす大氏ノ疹也輕重難症左ニ記ス

疹先出テ翌日熱來ハ不順案ルニ今般如此類ノ者可多乎

發熱して後翌日疹出ル者順疹也

發熱して三四日過ての後漸ある者疹子出方品あるべし半順

發熱初て出テ翌日さむるといへ共疹數而伏する者是實ニ疹宜シ

發熱甚しうして翌日熱ゆるく疹次第ニ出ルこと有もの是吉疹也

疹毒濕ニ有て水瀉吐蚘するもの有り絶食胞ク便閉するもの大事也

始より熱甚しく六七日至テ解せざる者及十二三日必ス死ス

疹後熱結ひて大便祕する者むつかしく供人ニよりて三黄丸を用て苦シからず

疹熱甚しうして小便閉塞するもの至テ難症也治方氣をつくべし

疹陽明焦燥ニして大渴あつて飲を引ものハむつかし心得べし

疹出て絶食ノもの積塊ニ停られて食通せず上下往來して藥も呑まずあるもの是至テ難症也

疹後熱ありて陽明ニ甚しきハ衣を捨テ走ル者あり難症也強劑無用治方品あるべし

疹熱甚しうして下血衄ありまた小便血あるものは至て大事也その心得あるへし

疹色潤閏淡キものは害あり必ス急ニすべからず周章するは却テ害を求ムふかれ共亦忽ニするにもあらず

疹出テ忽チ沒シ悶亂息鳴胃爛れるは難治也可恐

疹五六日ニて絶食ハ日頃より食進ハ害なし

疹六日目ニ出揃七八日ニ沒シ熱をなす亦自解

此已後所々品あり

筋際内從ノ手ノ大陰肺經列夫孔最經渠大淵魚際五穴失　手小陰心主小海靈道通理陰郄神門五穴　手厥陰心包終疹出則爲發揣之終ニ若シ疹症輕キ者ハ疹稀而此三陰經ニ不出則根ク者雖爲疹子也　案スルニ如斯類コレアレトモ古方ノ勇治ニカヽルベカラズ

右危症ノ類ハ醫師前後共ニ其心得可有もの乎

古書曰疹ノ熱ハ疹毒ニ因テ發する也疹子ハ因テ發熱ニ出テ表也

案するニ今來ル所ノ疹者自表雖謂可爲各裏皆濕毒ノ集得授之者乎

往古ニ云ガ如ク疹者可因藥劑能可發テ表ノ毒氣下陷而令胃爛也必以勿拙成故於疹子見其脈輕重疹遲速人之强弱ニ受血有餘血不迎者也是能ハ察之分覺而后可用其藥劑可施于之也疹凡日數八日ニ應ズル者也故少モ誤ルコト勿レ至テ醫難得効者也不斷心掛專要也

疹ノ治方古今ノ定法ありといへども皆大方にして疹治ニおゐて其審詳也とせずこゝにおゐて兼日其嗜可有也誡ニ往者ハ隨ヒ來ル者ハ迎ヘ遇フ者ハ耗不及者ハ追ハ增シ遲者ハ晋早者ハ不遂勢盛ハ瀉下勢緩于表散淡色者和血生血焦黑成紫血ハ解毒令涼血是古今疹治矩方也然レトモ予案するに一概箇様にもあらず今般ハ專可加其差略も或書曰已知不出疹而不辨疹之停血有餘不足各々一統藥用而謬之誡有其語疹子獨不殺于人庸醫ト與藥食而害人トアリ疹子初より漸く七八日限病容にして至テ手ノ早キ者殊ニ來ルことも早し瘡より一段として六ケ敷輕シといへとも必踈ニすべからず等閑ならさるをや

急死卒死ノ者多シ如斯三陽也五會ノ法アリ至テ疹ノ急死ヲ救ふべし神方也嗜テおかるべし

今疹後には別して咳嗽咽喉痛ム人多し早ク不治セ一世ノ病となるべし

家方甘露丹

右ノ咳嗽ノ類ニ太タ妙也

薄苛　五味子　桑白皮　白茯苓　桔梗　干姜　枳實　百藥煎　甘艸　各分量口傳

右蜜煉リ少生姜ノ自然ニ汁ヲ加ヘ白湯ニて輕重ニ隨ひ用ふべし

家方仰発金烏丸ヲ前後ニこれを用ふ何れも滯なし大効アリ

稚兒小童土器ヲ嗆ひ土ヲはむもの今疹甚難症多し早ク恐れて先達て治要あるべき也

參蘇飮ニ參ヲ去リ水飛メ黃土ヲ加ヘ用テ右小兒ニ宜シ

亦炭ヲ嗆ヒ灰ヲ咕ル童アリ右參蘇飮ニ不灰木ヲ其儘酢ニテ一煎シ麪ニ包燒テコレヲ加ヘ用テヨシ

疹ノ急死ニ及救方コレアリトイエトモ人意謗ヲ恐レテ事ヲ殘ス

享保年中疹時行ノ節京都ニ於テ四條通御旅町ニ龜屋七兵衞トイフ者三好家ノ傳方霜臺散トイフ煉藥ヲ賣出ス

疹後宜キトイフ敢リ繁榮シテ今ハ富家トナレリ

家方ニ疹ノ後煉藥ヲ以咳嗽浮腫ノ氣味能是等ヲ治ス

陳皮　前胡　桑白皮　各六　薄苛　小　瓜蔞　小　蘇子　中　桔梗　中　杏仁　中

右蜜ヲ以テ煉和シテ用フ亦右ノ方ニ前胡ヲ去リ五味子ヲ加ヘテ用フ　丹臺玉案ニ出ツ

序初ニ一扁寒藥石劑ヲ以テ强ク發表ヲ得ハ大キニ非也假令一旦治スルトモ疹後他病ニ變必ズアリ落命可シ恐可シ慎ム

痲疹氣候錄

安永五丙申春

痲疹ハ天行の疫邪によりて發るとありて十二支の二めぐりの頃にはやるよし醫書に記す南人は麩瘡といひ北人は糠瘡呉に痧疹越に痦瘡といふ日本にてはしか稻目瘡赤疱瘡ともいへり

〔編者曰ク原本此ノ所貳行空白〕

一　七月十六日　大白雨　和州櫻井村札之辻伊勢屋與兵衛といふ油屋の內へ雷落油壺へはまり死ス尺三尺斗　公儀え持參し其跡大坂道頓堀にて見せる木戸錢六銅　畫帖ニ圖アリ

伊勢內宮

佐藤伊織

安永五年ひのえさるの寶曆甲戌元曆　翼宿値年　凡三百五十五日

大さいさるの方　位本をさくる

大きりくんむまの方　三年ふさがり

大おんむまの方　さんをせず

とりとくあきの方　こむまの刀方より

金神　ねとりとる　むまのひと

さいけうとらの方　ひのえてまたすぎ

さいそとらの方　ふさがりてうさぎ

さいせうひつじの方　よりうさぎ

さいてんさるの方　ひのえ刀もしめよ

さうひいぬの方　むかひて大小へんせず　ちくうのいとめすべし

正月大　建　庚寅　星宿値月危宿月曜値朔日

一日さるのとのとりあふむ　今吉書始

土公　春ハ井戸　夏ハかまど　秋ハ門　冬ハ竈

正月大　二月小　三月大

四月小　五月大　六月小

七月大　八月小　九月大

十月大　十一月大　十二月小

二日さのえいねるり　火

雨水正月中いねの八刻日の出今日全ニ戸四十四刻余夜十五刻余六分六ニ戸四十九刻余夜十一刻余

三日さのとのいおさむ　火

[illegible]

啓蟄二月せう今曉くしの五刻八日の出今日全ニ戸四十七刻余夜十二刻余六分六ニ戸四十二刻余夜十七刻余

二月小建　辛卯　張宿　壁水よくし

春分二月中しろの二刻日の出今日全ニ戸五十刻六分六ニ戸五十五刻夜四十五刻

清明三月せうむまの七刻八日の出今日全ニ戸五十二刻余夜四十七刻余六分六ニ戸五十七刻余夜四十二刻余

三月大建　壬辰　翼宿　奎木よくし

穀雨三月中とりの四刻日の出今日全ニ戸五十五刻余夜四十四刻余六分六ニ戸五十刻余夜四十九刻余

四月小建　癸巳軫宿　日土

小滿四月中今曉七つ半の六刻　日の出今日今ころ五つ半二刻余夜四つ半二刻余夜三つ半六刻余

立夏四月節今夜丑の初刻二日の出今日今ころ五つ半二刻余夜四つ半二刻余夜三つ半六刻余

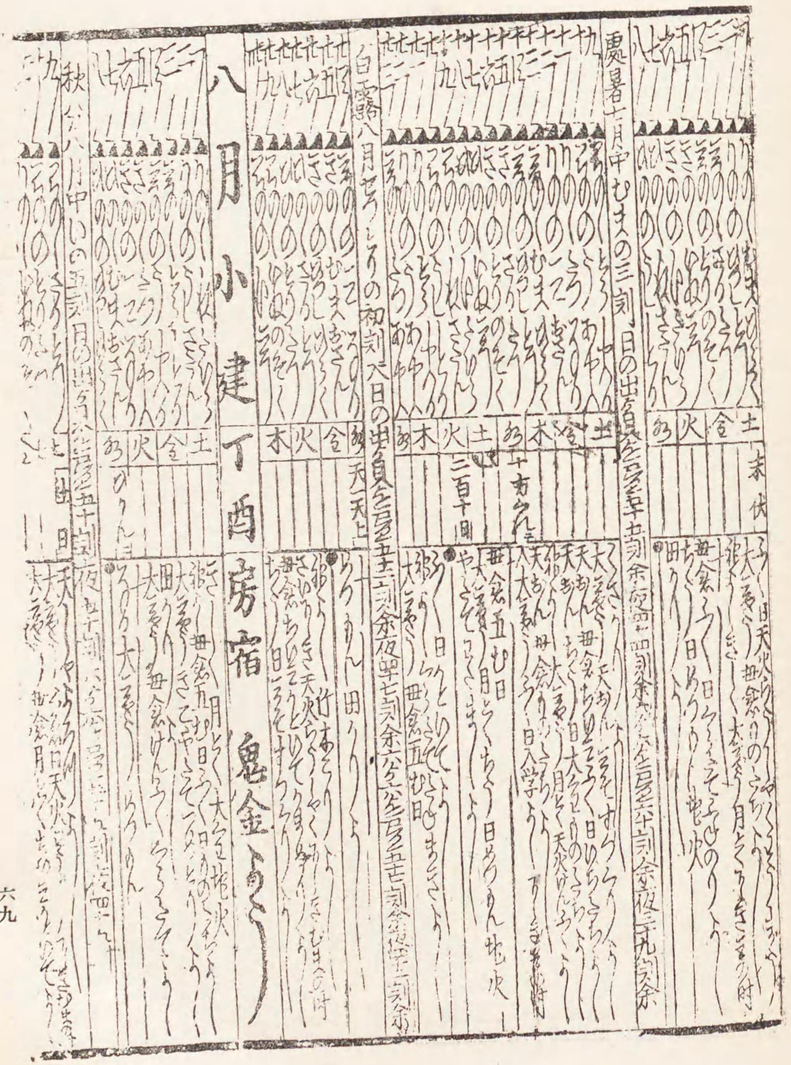
五月大建　甲午角宿　昴日

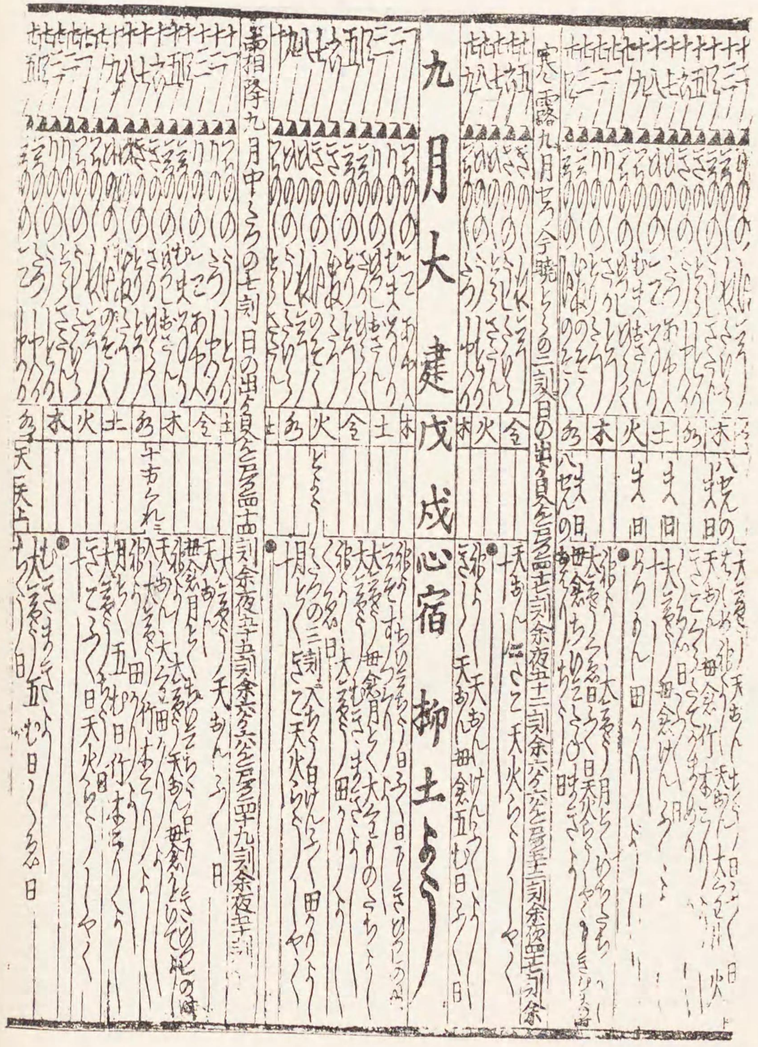
芒種五月節今夜丑の二刻八日の出今日今ころ五つ半二刻余夜四つ半二刻余夜三つ半五刻余

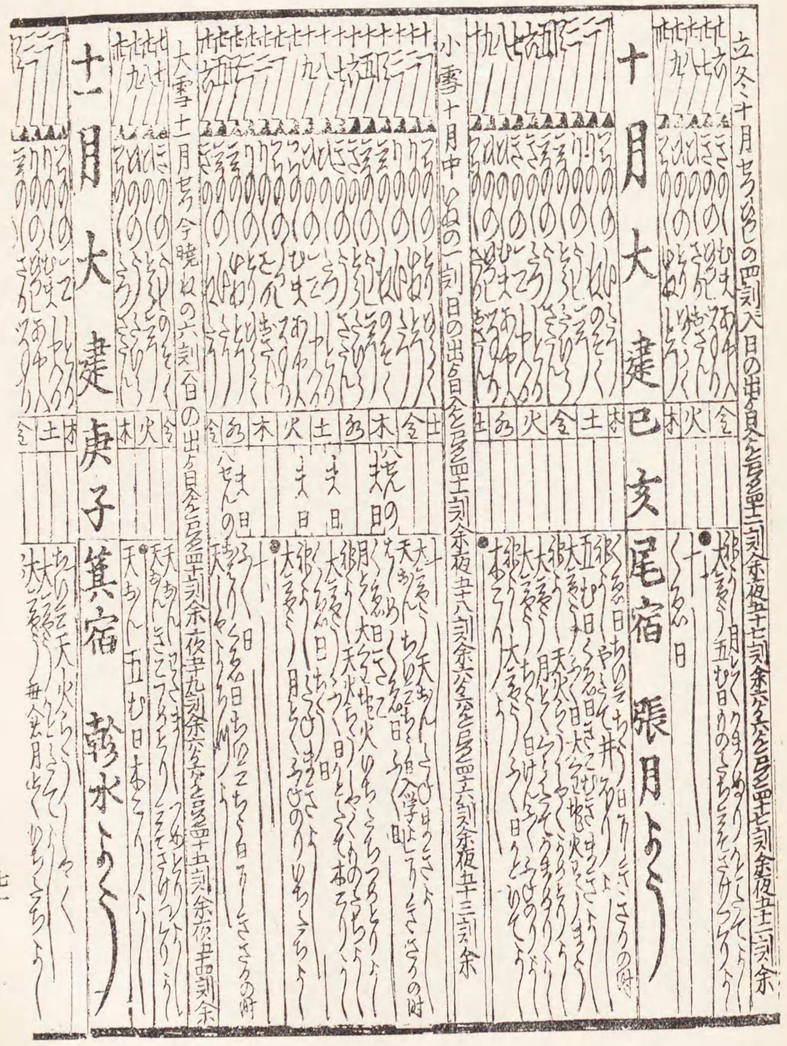
生麦五月中今夜丑の八刻　日の出今日今ころ五つ半二分余夜四つ半二刻余夜三つ半五刻余

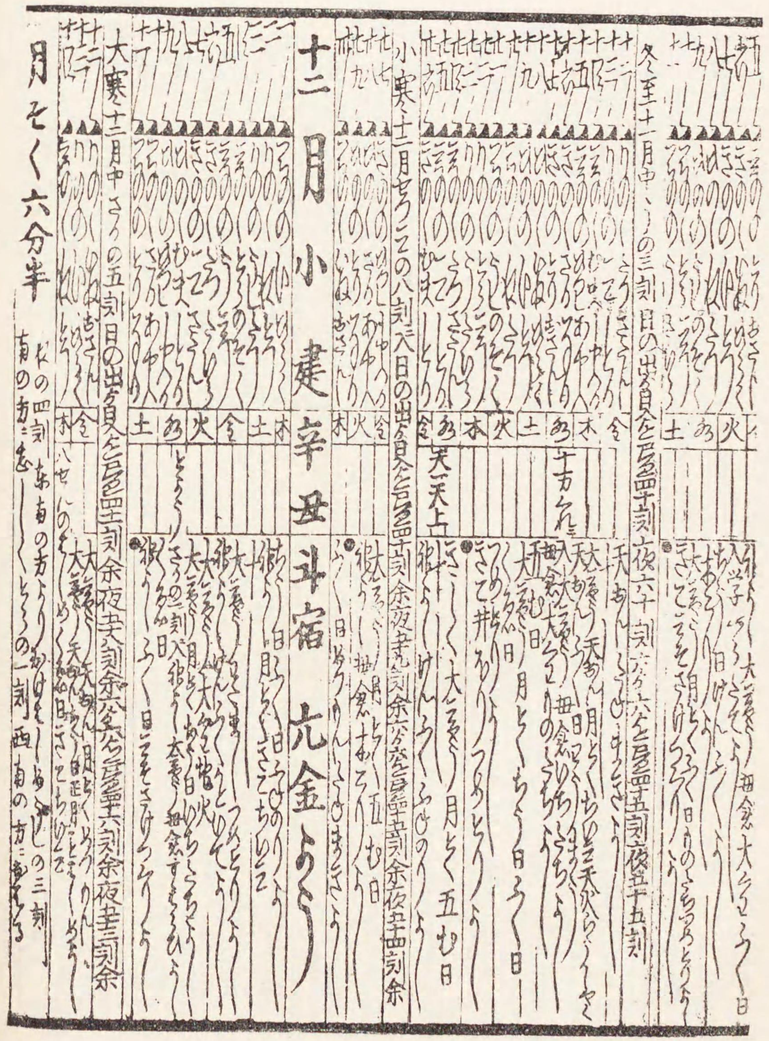
小暑六月節今夜丑の四刻八日の出今日今ころ五つ半九刻余夜四つ半二刻余夜三つ半九刻余

六月小建
乙未
亢宿
觜火よろし
七月大建
丙申
氐宿
參水よろし


八月小建
丁酉
房宿
鬼金よろし






十二月小建辛丑斗宿亢金

安永四年出　立表測景定節氣者二

安永六 丁酉

一

一 正月 名妓扇屋夕霧百回忌

下寺町淨國寺ニて法筵あり 施主新町西ノ扇屋甚藏

白の字に一さしかけて松の花 下物

百々春や寔に目出たふ侍ひける 龜亭

一 正月四日 堀江心中

角之芝居小川吉太郎座ニ而去冬北濱の心中と一所ニ取組同八日より新狂言切付ケ

去年今年紋日噂

一 當春 伊賀越大當り

中之芝居嵐七三郎座ニ而去冬十二月二日より伊賀越乗掛合羽といふ新狂言四月十八日迄大入

翌日四月十九日竹田芝居ニ右狂言之看板出し同日ニ初日是又大入に而六月廿五日迄勤ム

一政右衞門 竹藏 一又五郎 伊太郎 一 丹右衞門孫 八 他藏

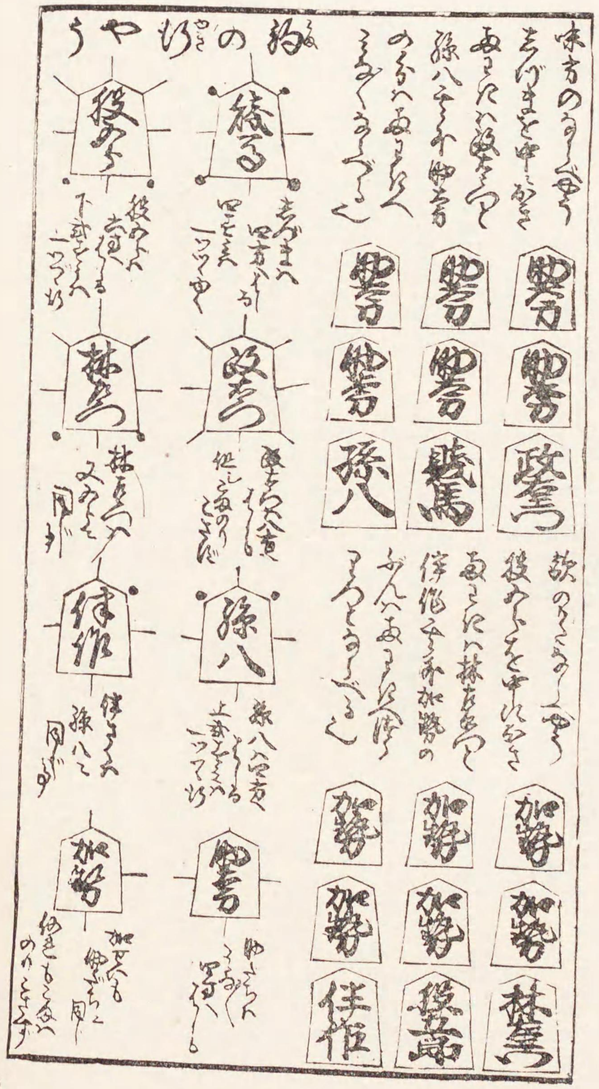
一 浪花名物富貴自在ニ云

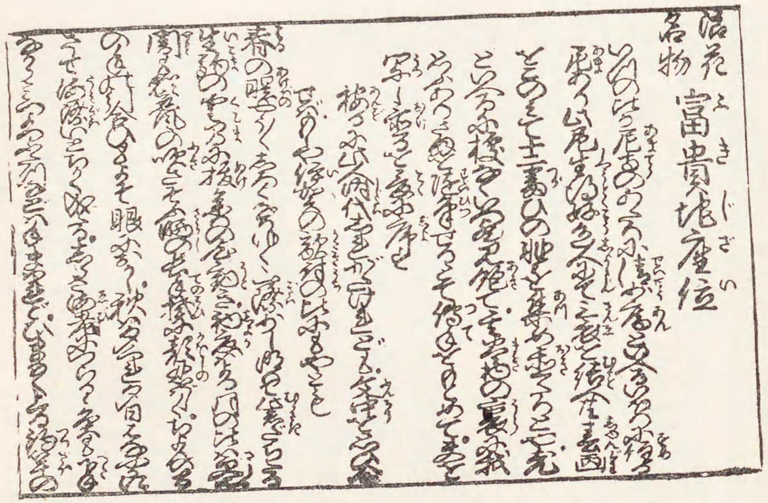
心地よけなる物は吉田一保講尺(經)唐も倭も今も昔も此人の見ぬ軍はあらしともとて讀切のよみさしに畫

寢の夢もいさみて見るいとまなくも實に戰ひに汗をひたさし嵐座のはやるも此辯舌よりもはやらした

伊賀髷　伊賀鬢　伊賀小紋

などもにくげながらも浪花の癖とて





海苔の雛を

○蘭おるるの名を　○みぬも食の濱あ　○蜂井食のみん酒　かりは

まつまも浮ひとうりみみもとうさぐり

○玉藻吉野の名所絵扇

玉藻前細末のさとと風のそひまきんう

○小山食の雪燈籠　三井の苔

さも隙ぶらぐ　○服二宝麻　八百屋町　○絵ぐ一重屋

○十三の年ぎ狭細うみぎ

菜々

○鯨の茎漬　○八枝の目菜

○江戸の浅の新虎香　○向絵屋　○小川食　○小川食

○梅食の乳茶

○重ハ西瓜　○法螺　○小ハ搗

○団子食のほうぐ　○湯屋座

○蜂井食のみん酒　かりは

○絵ぐりの雛方　○玉藻前の絵扇

玉藻前細末のさとと風のそひまきんう

○小山食の雪燈籠　三井の苔

さも隙ぶらぐ　○服二宝麻　八百屋町　○絵ぐ一重屋

○十三の年ぎ狭細うみぎ

○大丸ちのとう　あら町

○鯨の茎漬　○八枝の目菜

○江戸の浅の新虎香　○向絵屋　○小川食　○小川食

○梅食の乳茶

○おもかげ香　○西瓜　○法螺　○小ハ搗

○団子食のほうぐ　○湯屋座

○虎屋の饅頭切り

○竹田のからくり

○女の髪結

○天満まつの松

○大丸ちのとう　あら町

安永六年十一月吉日

銀座　茶屋半兵衛
同本

一　十二月十九日　天滿火

晝九ツ時堂島蜆橋北東詰小茶屋の二階より火出て次第に東へ燒ケ船大工町老松町十一町目邊まで燒行天滿堀川を越ル　又晝七ツ半時天神の表西の門前町家より火出て二口の火つるにひとつニ相成り天滿天神社燒て又次第に東へ燒行川崎まで燒て東組與力町類燒淀川岸まで燒抜ケ翌廿日の朝火鎭ル

一　同日　戌島火

十九日晝七ツ時より出火三四町斗り燒失千石餘の大船三艘燒ル夜九ツ時火鎭ル

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　小竹榮五郎死

一　當夏　力持ともへ大流行

安永七　戊戌

一

一　當春　道頓堀ニ而　初音耳作

生國豐後の者　初め右の耳より音を出ス或は大文字屋の歌を諷ふ若口中に笛などの仕掛もあらんかと疑ひを散んぜんため烟草をのミながら耳より大聲を出ス事たとへハ竹細工の象ごまのごとし諸人奇也とて見物夥し

一　當夏　洛東黑谷四十二世神譽上人大坂市中御巡行有之　道空町靈驗地藏尊開眼なし給ひしより參詣多し

去冬十二月廿七日夜八ツ時黑谷本堂方丈庫裡等不殘燒失ニ及びし故也

一　六月　京大坂ニ正月之儀式行ふ

此頃家々に正月の儀式をなし雜煮を祝ひ節分の體をなす事寶曆中のごとし

一　同月　疫病流行

傷寒は風のかハりに來れともまた吹かへる伊勢の神風

此歌を書て七ツ葉を添て帶の縫目に入置べしまた門口に張置バ其疫病を遁るゝといひふらす

〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　當夏　難波新地夕涼にて祇園會山鉾の作りもの見せる　初は京都四條にて見せたり

一　同所にて　植木鉢植細工の見せもの

一　同　丹波國大江山出生の大男

一　當夏北蜆川燒跡ニ而夕涼を催ス

阿蘭陀舟の見せもの

一　六月　大坂大雷　廿四ヶ所落ル

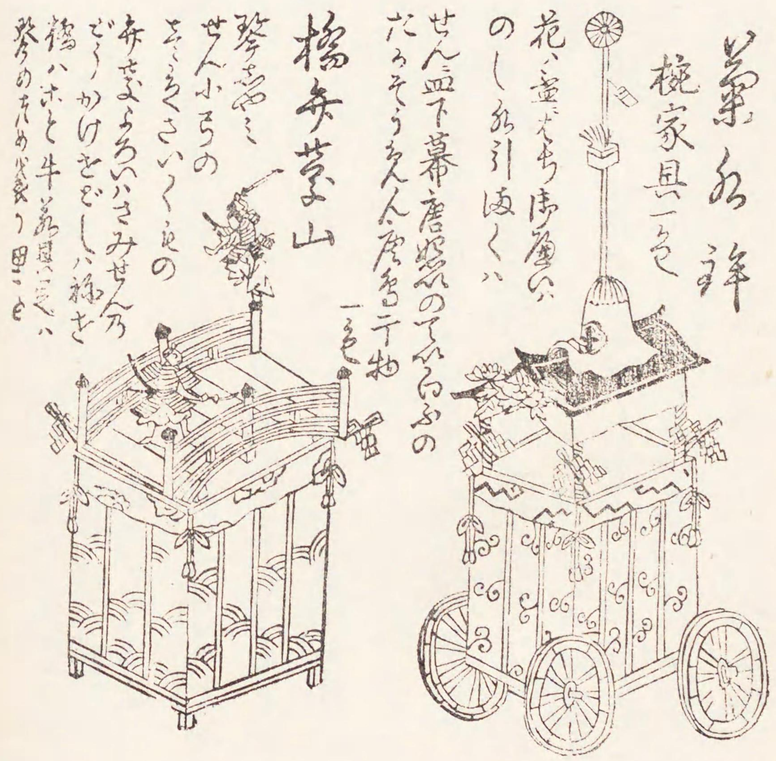
一　十一月十日より　堀江豐竹此太夫芝居ニ而あやつり顔見せ

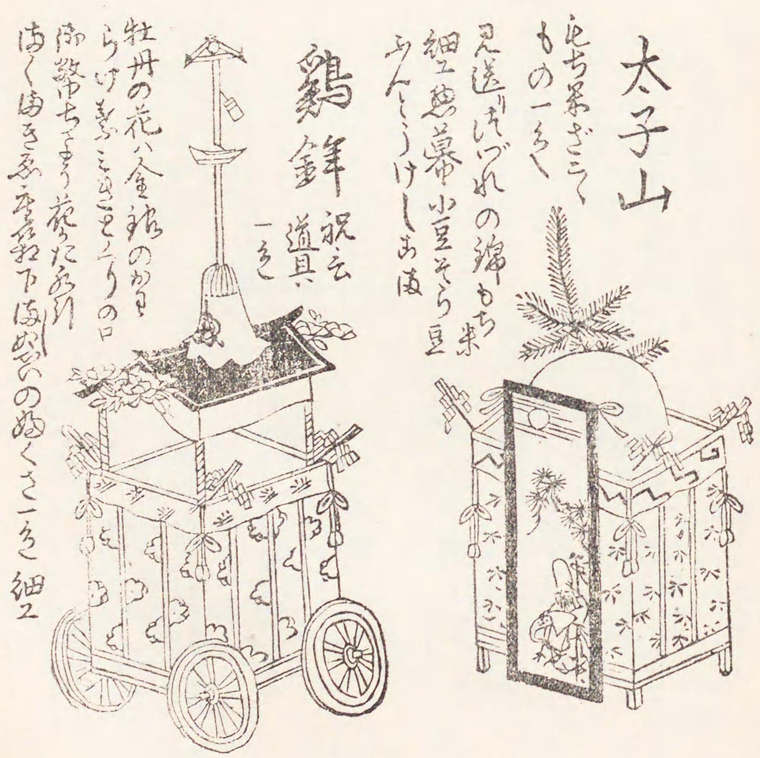
妹脊結町家仙人

寄物
細工　祇園會山鉾

難波新地夕涼
入御覽ゆゑ御見
物御おなぐ希上ゆ

抑祇園會山鉾由來の義ハ天祿度中之比都ニ
疫病行て萬民ハ中ふ及高類富都とも苦悩
諸人祇園牛頭天王ニ立願越し難を逃物御礼
之為供物又ハ屋寺ハなとエ出しらへ拵納する千瓊
結構ニ相成山鉾内裏ハ參入す御教説ありし事
室町殿例年御見物有之事古記ニ見ゆ其ニ詳
數六十六本山數八十四六月七日ゟ同十四日ゟ祇園之
御旅所ハ引寄する事此の御旅所ハ烏丸通高辻ニ
有之今大膳院之興見也四條ち町ハ御旅所
移りし事太閤秀吉公之御時ゟ云


菓子鉾
椀家具一色
花ハ盃ニ尤も御屋ハ
のし紙引ハくハ
せん皿下幕唐紙のてれ白ふの
たゝそうえん人唐香干物
一色
橋弁菱山
琴ゆゑ
せん小弓の
さゝえくさいく花の
弁菱よろいハさみせん乃
どうかけをどしハ稱を
橋ハ赤と牛菱具ハ是ハ
琴のため火食り黒ニ色


太子山
花ち果ざこ
もの一色
見送りけづれの綿もち米
細工悪幕小豆そら豆
ふんとうけしあゆ
鶏鉾
祝云
道具
一色
牡丹の花ハ金銀のかな
らけ葉ニ白ことくりの口
御幣ちさまり花たれ引
ゆく御き茶本紙下御ぬいのぬくさ一色細工

山伏山

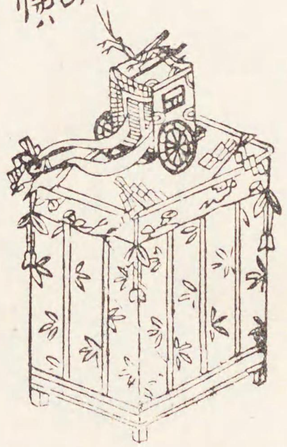
神道神前
道具一之

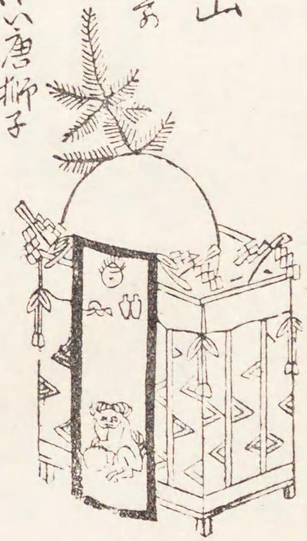
見送りのてい唐獅子
十二銅色紙一之

蝸蜋山

御堂上様御
裝束一之

かゝきり狩衣の
袖車市女笠懐ハ
石帯窓ふやし也

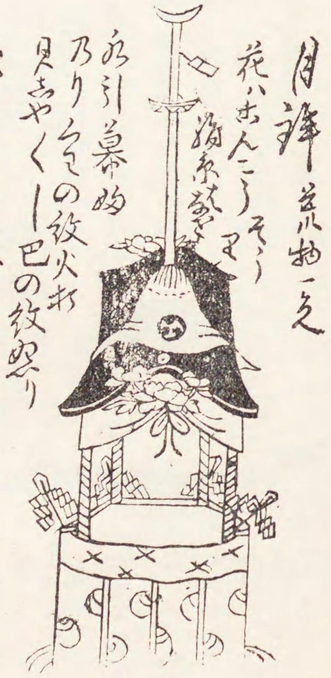




月鉾　荒物一之

花ハ出んこうそう
獅子蒙々

所引幕物
乃りくるの紋火打
見ふやくし巴の紋怒り
ふやくし下幕たんぢう
切屋ち波

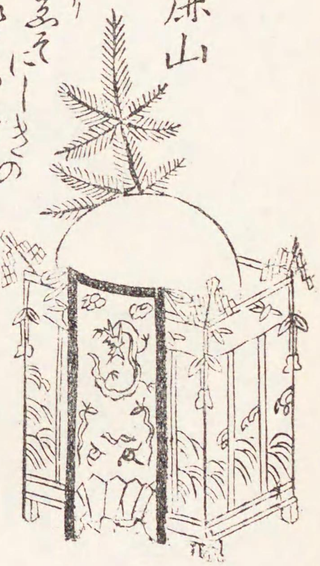


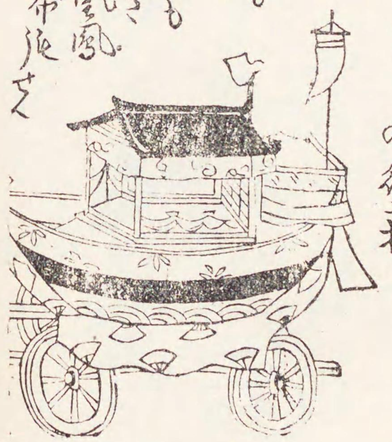
郭巨山

馬道具一之

童子人形手怒りあふこ
石帯力皮

鈴蘇山





舟幷

安永八　己亥

一　三月三日より　泉州家原文珠開帳

一　同月十日　五畿内大雨大雷江州鏡山邊石部草津の間大雹ふる大キサ茶碗のごとし人馬損ズ

一　四月上旬　大に寒じて冬のごとし

一　五月廿三日　五畿内大雨大雷

一　七月一日　又もや五畿内大風雨

一　同　廿三日　大水

一　同　廿六日　霖雨

一　當夏大坂御城内御番衆荻野源左衛門殿家來常治と申者十八歳ニ而主人を殺害いたし大小を盗み取直様召捕られ町奉行所へわたり入牢其後高麗橋にて三日閒さらし鋸引の刑罪夫より野江ニおゐて磔ニ行ふ右鋸挽の刑は大坂御治世より此者が初メなるよし

一　七月　鰒の御觸書

此節鰒を喰相果ゐ者共四人有之ゐ食類之義ニ付竇員差留ゐ筋には無之ゐへ共時節も可有之義ニ而是迄魚ニ

あたり相果ゐ者共毎々有之ゐ上は暑之時分は鰒實買見合ゐ様にも可致ゐ魚屋共當然之利德を存知暑中損シ魚ニ而も厭なく下直ニ賣拂ゐ故輕キ者共買取喰用致シ既ニ右毒ニあたり死失ゐ様相成ゐ畢竟買ゐ者之不覺悟とはいひながら輕キ者共之義故其辨も無之人命ニ拘りゐ段不輕筋ニ而致後悔ゐ迚も無詮事ゐ條向後鰒賣買致ゐハヽ時節をも相考性合は勿論新古之義は篤與相改可致賣買ゐ以上

亥七月

一 江之小(子)島はな築出ス

一 **ヱレキテル**　日本にて新製して諸人ニ見する東都平賀源內の工夫のよしこの人火浣布を製ス風來山人と號しまた福內鬼外とて戲文ニ妙あり　神靈矢口渡　實生源氏金王櫻　忠臣伊呂波實記などの作者也

大坂大江字兵衛工夫のヱレキテル難波新地にて當夏の涼ニ出ス同年紅毛へ渡ス……原本此所以上ノ書入レアリ……

一 **天下茶屋津田氏庭に藥店(ぜさい)一艸の閣を營み壺天閣と名付ク**

一 若女形中村喜代三死

〔編者曰ク原本此ノ所貳行空白〕

一 月江寺　三味線墳建

浪華の粹人辰巳屋平兵衛といへる人の追善として新町楓屋善七建　花紅葉の唱歌碑の裏ニあり

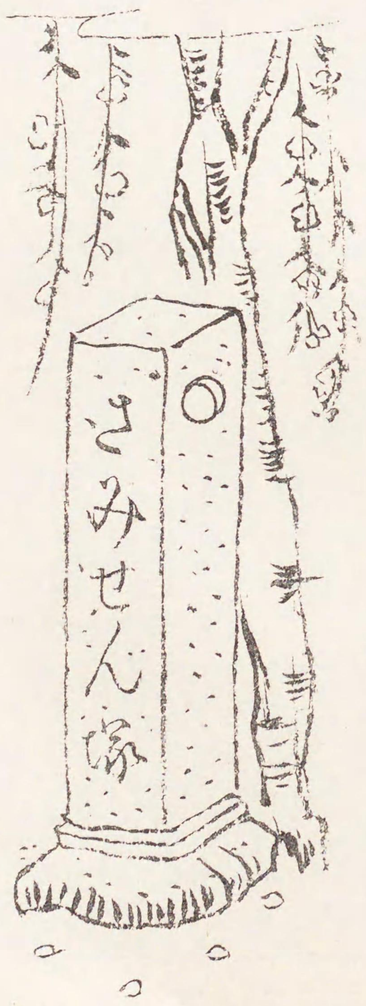
御堂上方作　小林檢校調

花紅葉　二上リ

花も紅葉も散りぁほか有とのとても散ロなら風に任せて散レかしな雨にぁほれて枝にくちなバ色もなや鳥のふミしく猶つらや露も匂ひもさくりとぁたがよいわいな

或人のかえうた

色も情も知らぬ昔がましおやいなとてもぁろならねからそこからぁれかしな百夜かよふてやつれ男は面白や逢て消たがなをうれし寐ても丸寐はころりとぁたがよいわいな



此塚三方に穴をほり人毎に耳をあて音を聞とやこれも一曲ならん

安永九　庚子

一

一　五月廿一日より　難波新地ニおいて相撲興行

勸進元　高崎市右衞門　差添人　江戸崎小三郎

大坂ニ於て差添人の權輿とす

一　九月　金銀星出ル諸人これを祭る

一　同月廿五日　三枡大五郎京都ニ而死去

一　十二月八日　初代嵐吉三郎死去　行年四十四歳

一　當冬　大坂北在長柄村十右衞門と申者入牢之内牢内ニ而女を犯シ右十右衞門遠流ニ相成ハ處備前沖にて嶋へ上り此所を逃去ハ故直樣召捕之上再び大坂表にて入牢仰付られハ處又ハや夜ぶん牢拔いたし是又召捕此度は手がせ足がせを入られ重罪ニよつて千日法場ニおゐて獄門に行ハる

一　五月　大相撲十日目五人懸り

祭礼渡御圖
士ぶん
猿田比古
傘持
行持

二
太鼓

御神輿出御
武者

押弐人
合羽籠
拾荷
小人十三人
小人十三人
長柄九本
家本打
弐人
寧領弐人
長柄廿筋
寧領弐人
弓十挺
挾箱
弐人

長柄九本
長柄持
松明
市女笠
七
白張四人
士武人
六

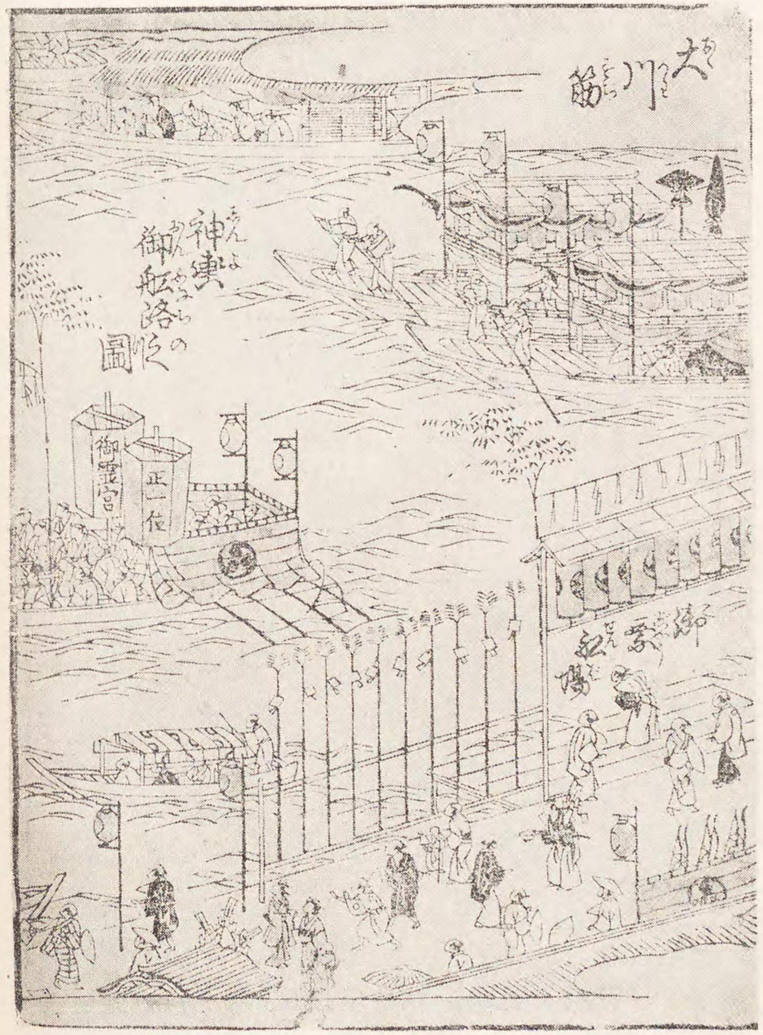
陸人
前後
六人
稱宜
士
長刀
八
神人
士武人
九
神人
士武人

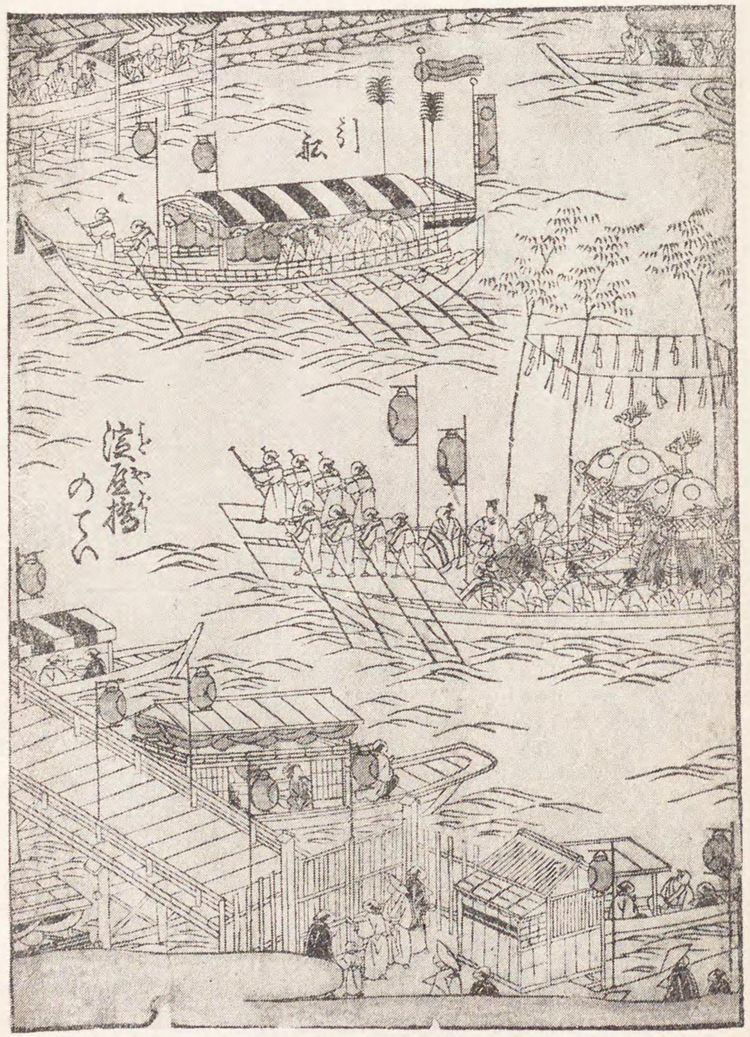
士二人
拳銃
鳥銃
挟箱
傘蓋
布衣士
二人
鎗持
(十)
神人
士六人
傘持
(十一)
士三人
鳥銃
持
祝部

(九二)
布衣士
二人
神主
乘輿
(九三)
士六人
警衛
布衣士
(十)
士六人
鎗持
警衛
(十一)
音頭六人
拳銃
後詰武
右白虎
左青龍

長刀
十七人
馬拔持
鞭持
返縄
隨身四人
布衣四人
御紐
御弓
御綱引
四人
御鞘
小童
前後四人

神馬
御蓋
御床木持弐人
御傘持
御沓持
布衣三人
神輿
御綱引
四人
駕輿丁
前後十弐人





鷲ヶ濱　八雲山　綱ヶ崎　濱
柵　荒見崎　風
谷風　窟　槇ノ戸　加治ヶ濱
竝松　初瀬川

一　六月十七日　龜井町御靈宮祭禮渡御始ル　御治世の後寛永十八年正月故有て祭
天正年中　豐臣家の命に依て舊例のごとく神妛あり其砌御太刀神馬寄附　上古は正月なりしを今年改めて六月十
祀中絶ありしが共今年　公命に依て再び先規のごとく神事有之神輿渡御　七日とす中絶之後百四十年ニ而再興
〔編者曰ク原本此ノ所壹行空白〕

一　鼓弓名人　政島　　死
其子彌兵衞もよく此藝に達し中にも鶴の巢籠を奇とす

一

初
大序　山本春太夫
中　山本佐世太夫
切　山本小野太夫

三
口　山本小野太夫
乃行　山本千代太夫
切　山本春太夫

五
口　山本音太夫
切　山本元太夫

三絃　岡澤彦久郎

貳
口　山本元太夫
切　山本千代太夫

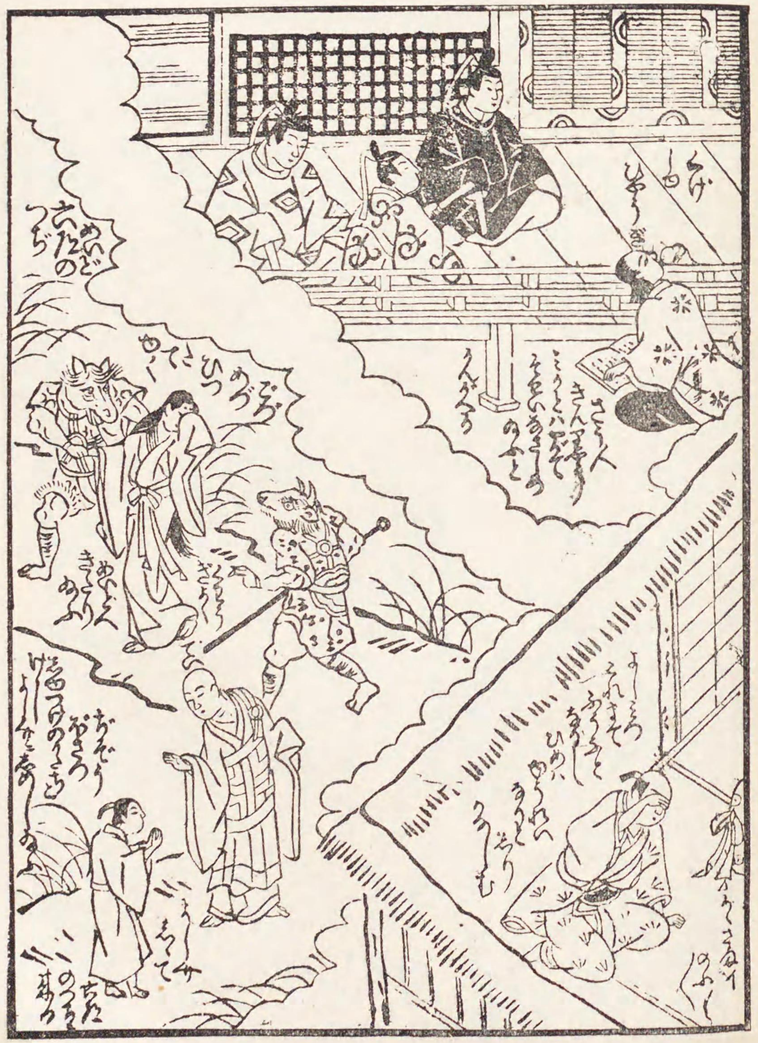
四
口　山本佐世太夫
中　山本千代太夫
めぐの段　山本春太夫
切　山本元太夫

三絃　春沢志十郎
春沢庄久郎

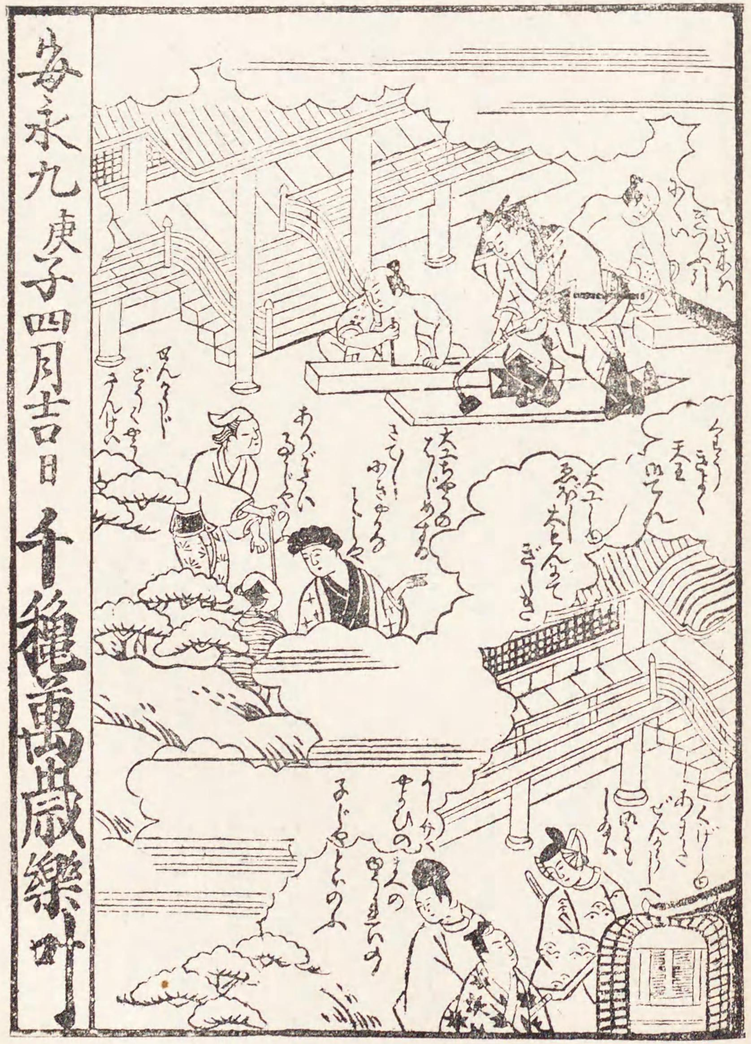
板元　山本春太夫

善光寺入佛供粮

四六



四七


永九庚子四月吉日
千龍萬歲樂叶

安永年閒

一　庚申塚は何國にても村はづれにありそが中に大坂上町の庚申塚は昔より名高き所なりしに安永の初の頃上本町札の辻を西へ出る所の土取場へ桃を植る依之世俗もゝ谷と呼ぶ近來東南の地にも專ら桃を植て地主大きに益あり又小橋より東にも桃を植て桃谷南手上鹽町壹丁目北へ出る右手にすこし土を高くせし處これ往昔の庚申塚なれども今は道筋垣より內に成て知れがたし

一　河鹿之事

物類稱呼云　河鹿　山蛙也

谷川の流れにすみて濁る水にすまぬもの也其聲鹿ニ似たり故ニ河鹿と呼ぶ魚ニ同名あり別物也常の蛙の羣ル中へ放ス時は則常の蛙聲をとゞむと也肥前にては是をかハづと呼ふ常の蛙をハカヘルと呼也古哥に蛙なく吉野の川の瀧の上にとよみ又三輪川の清き瀨など詠る類是皆山蛙也常の蛙は聲かまびすしく山蛙は聲清く寂しき物ニて鹿の聲共聞え又鳥の啼とも聞ゆるもの也とぞ　無名抄ニ井手の蛙の面白きよしを誌すこれ山蛙也

杜父魚（いしもち）　京にていしもち　嶽義ニていまる　伏見ニて川をこぜ　江州にてちんこ　西近江にて道滿（ドウマン）　筑紫にてとんぼと云也

此魚夜鳴故に河鹿と云　哥にもよめり哥うたひ共云とぞ　……原本此ノ所以上ノ書入レアリ……

安永の初め頃江戸に求メ寄りしより其後京師浪花にもこれを翫ふ

一　新町筋　二階建

富貴地座位ニ云　安永六年酉四月上木

近き頃ひやうたん町も通り筋の二階建多くなりしも鬱としく

一　着類の袖口けしぐゝりはやる

婦女の袖口にけしぐゝりといふもの專ら世上に流行セり其比けしくゝりの唱哥は六軒町倡家河內屋勘兵といへる粋人の追善ニ出ス

けしくゝり　鶴山勾當調　紙屋源右衞門作

子日せし松ニよりにしやどり木のとみしかつらも露にぬれちぐれの雲にあふと見し嵐の木の葉ちりつかに鹿もとまらぬミつせ川なれし絲には似ざりけりなゝの紋日の音物すごき山彦さらに空しき契りさへかはかん袖のけしぐゝりむすふあさぢに置霜の春にあはめやのりにあハめや

乾かぬ袖をかハかんとうたふも河勘追善なれバ成へし　……原本此ノ所以上ノ書入レアリ……

此作者は朝三といひて赤石の人也木端翁の門人にて狂哥をよむ一日木端遊所に行て哥妓の三絃を聞うち朝三作のけしぐゝりの事を思ひ出て此哥を所望するとて

袖口のあかしの人の作りたるけしくゝりをハひいてたもとよ

かくなん口號ミぬ

一　短吟流行　世俗五文字附といふ

油落ス粉糊　野等が止ムと案じる親心
極樂落シ米粒　フウハリと乘りそうな口車
水底荒和布　名代に女房を遣る

かゝる句體也明和安永中盛んに流行せしかど天明の末より衰えて冠附の雜俳のミ世に行ハれまゝかも其風體拙く成行折句も希也

一　孟宗竹生ル

北山圓淨寺（久安寺近邊）境内の藪より寒中に筍生出る長サ六七尺に及ぶ世俗孟宗竹と名付く

一　茄子田樂の串之事

古老云　茄子田樂を燒に中古までは串一本指たるゆへやゝともすれハ打返りて燒やう惡かりしに今のごとく串二本さして便利なるやうに成たるは安永中也

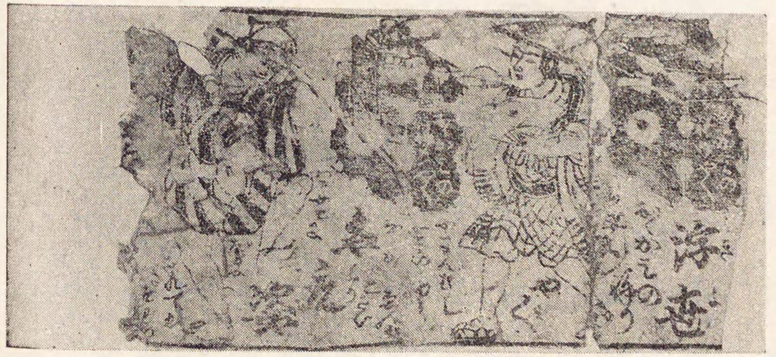
花禮會稽褐布染道行の文中に

〈茄子田樂にあらねども髮にとろりと油ぬり二本さしたる身なりしが

此戲文安永三年午八月　其頃までは髮はけにて油を塗る事を知らず割鋏につぎ切をはさみて油を塗たる也都ての所行かくのごとく世智かしこく成れり

一　手妻名人　宮本

一　輕わざ　早崎京之助



五四

一笛簫（フエフキ）坊主　思ひ川戀川坊主といふを大井川坊主と呼ふ東海道大井川の驛にて非業に死たる旅人の再生也と附會の說アリ

融大臣鹽竈櫻花第四ノ口ニ云

〈裾に短ひ破れ衣淺黃頭巾も煤けた顏鼻筋赤い笛簫坊主鉦の拍子もそゝくさと南無あミた佛〳〵ヨイサ〳〵此所行も通ふも思ひ川戀川仕業をするも戀の道商ひするも戀の道一切此娑婆にてする事なす事殘らす此道戀の道南無あミた〳〵ヨイサ〳〵神のミわたり佛のミわたり或は上々樣方の法妻たる共コレ此音樂より上の回向はあらさるや其理はいかに必ず信を持て此音を聞給へ南無あミた〳〵ヨイサ〳〵向ふの岸まで明日〳〵ヒイと吹たる一文笛は報謝の禮か回向かと云々

一吉田一保講尺（經）　安永六年條富貴自在ニ出

五五

天明元　辛丑　〔二月廿日改元〕

一　御城代　土岐美濃守殿　八月

一　西横堀　新渡邊橋かける

一　二月十九日　立役小川吉太郎死　行年四十五歳

中興ぬれ事の上手也京都一ヶ年大坂十ヶ年座本を勤ム千日法善寺ニ墓あり

春月院了相日仙信士

よへひ身も今は石なり此つよさほんにまあ〳〵是英子塚

一　三月　天滿天神社開帳

一　同月十三日夜　道頓堀火

一　五月　相模川事小野川喜三郎と改名前頭ニ成

一　同月　難波新地にて勸進相撲興行十日目東西の兩關に五人懸りといふ事を勤ム

東方　大關　谷風　並松　巻ノ戸　岩ヶ谷

西方　大關　鷲ヶ濱　柏木　葵山　初瀬川　陣幕　浮舟　八雲山　柵

攝陽奇觀　巻之三十六ノ七

一　七月廿七日　五畿内大風雨大坂通船十六艘水入
一　十一月廿三日　島之内火

一　三月廿八日より　一心寺ニ而嵯峨清涼寺釋迦如來開帳　五月十八日迄

〔編者曰ク原本此ノ所牛丁餘空白〕

嵯峨清涼寺釋迦如來　牛皮華鬘緣起

牛皮華鬘緣起

抑この牛皮の花鬘と申は人皇八十五代後堀川院の御母公に北白川の女院とておはしませしが御在世の間させる善根をもなし給ハす剩御臨終のみぎり風雨凄しく起り雷電天地を震動してまのあたり獄火の來現せるを見て驚怖惶懼その苦痛の御有樣ハよ所目にも堪がたきばかりにて空しく終らせ給ひけれハ安嘉門院いとなげかしくおほしてひとり御持堂に向ハせられ靜に念佛しま給ひつゝつく〳〵と御母公の事をのミおほしめし

つゞけらるゝにかくては後世の生所も定て善處にてハましまさしといたくかなしミ給ひて只管追薦のため處々の佛閣にそ詣てさせ給ひける中にも三國傳來のその名も高く聞ふ五臺山の本尊こそ世に殊勝にいませとて遙に嵯峨野の露をわけて親く當堂に來詣して思ひを亡母の薦福に凝し眼を瑞像の尊形に留めて至心に瞻仰し奉り低頭合掌して南無大聖釋迦善逝伏を願くは慈悲哀愍を垂てわか亡母の生所を知らしめたまへといともねんごろに祈誓し奉りて七箇年の間追福作善にのみ月日を迎へ給ひしかはある夜御堂に參籠してふしまろミ給ひつる御夢のこゝ地に本尊告させたまひけるハ汝の母罪障ふかくしてすでに地獄に落しかども追福作善の勳力に依て今ハ地獄の苦をまぬかれて畜生道に入り牛と生れ出たり汝其牛を見んと欲は明朝七疋の牛材木を牽て當寺の西より來るべし其中第四番に當りて黃なる牛ハ則汝か母の後身なりとをめし給ふに驚てふしのゝめ明わたるを待あへす西の門に出て見給ひしに瑞相ひしに違ハすして七疋の中に黃牛ありければいかに淺間しき身に落入給ふ母の姿かなとてすゞろに御落涙ましまして彼牛をとゝめさせられ當堂の西のかたに一宇を造らしめ繫ぎ置てもろ〳〵の香艸を飼よろしき食物を調へて養ハれけるに如來又告たまハく牛に生れてはその宿業を果し償ふてこそ其報盡て解脫をも得へけれ然るに汝母を孝養する思にて好食をあたへ養ひなばかへりて彼か罪まさりて畜身を難るゝ事難かるへしと佛勅背きがたくていたはしとハ思召ながら元のことく車をかけて材木を牽されける彼牛幾年を經ずして死しければ則皮を剝せ新淨の帷子を着せしめけり其帷子とは釋尊の御身を拭ひ奉りし帷子なりこれに依て彼牛を人間送終の儀式に準らへて野邊に送りて荼毘しけれハ荼毘の煙り忽紫雲となりて空にたなびき惡臭の氣ハたゝちに異香と變してよもに薰し速に惡趣を離れて

善道に生れぬるの奇瑞炳然たるものなり彼牛の牽たる材木にて西の門を建られ門の柱を彫らせて牛の骨を籠置皮にては御堂の太鼓を張り額の皮を以て此花鬘と作しおもてに黄牛のかた地を畫て本尊の御厨子の前に懸毎年三月十九日御身拭の法會を執行ふことは彼牛の死せる日なれバなりされは追福作善の殊勲唐捐ならずして既に地獄の重苦を轉して畜生の輕苦を受瑞像威靈の現驗超絶して速に畜身を轉して直に淨域に生れたり況や人道に處して釋尊の教に隨ひ彌陀の誓を信ずるの輩誰か往生を遂さるへけん各々志を勵して頓に苦界を離て同しく樂邦に至るへきものなるをや

〔編者曰ク原本ニハ此ノ緣起ヲ板行ノマヽ貳丁ニ亘リテ貼付ケアリ〕

嵯峨　清涼寺

天明二　壬寅

一

一　正月四日　摩耶山燒亡　同日阿州德嶋城下卅丁餘燒ル

一　二月三日　五畿內大風雨大坂通船破損十六人死　川口渡海船多く破損ス

一　四月　洛東黑谷再興の爲上人京師及び大坂町々へ勸化米壹升錢百銅施入の家ニ立寄佛前にて回向有り〔編者曰ク原本此ノ項ノ頭ニ〇印アリ其ノ何ノ故ナルカヲ知ラス〕

一　五月十七日より　大相撲　勸進元　竹繩半右衞門

東ノ方

鎧ヶ嶽　谷風　御所車　武藏野　宮城野

友綱　出羽海　猪名川　外ヶ濱　高崎

西ノ方

筑紫潟　鷲ヶ濱　虹ヶ嶽　杣ヶ華　友衞

出水川　渦ヶ淵　苫ヶ島　筆之海　小野川

今年は小野川才助養子小野川喜三郎去々年安永八亥年迄は脊切五番目ニ居申ㇾ所急ニ取上ケ子年より上々へ拔ケ安永十丑年之番付には前頭中程ニ居ㇾへ共亥年より江戸へ下り登り不申ㇾ故丑年大坂角力ニは不出然ル

に丑年江戸春秋兩度之角力ニ高崎稻川宮城野等ニ勝ゟ故專ら評判宜しき所ニ當寅年江戸勸進相撲ニて谷風ニ勝し事大坂迄も鳴り響き其うへ才助養子なるゆへ當所ニひいき多く夫故當相撲之興行を待得たる第七日目谷風小野川合セ其日ニなれバ見物山を成し前代未聞の大入場所ニ滿て歸ル人數ゑらず餘り之羣集ニ而怪我人多く卽死も三人あり先年稻川千田川取合の日大入せしか共又々夫にも勝りし事全く小野川壹人の評判高き故也漸々兩三年以前迄脊切ニ有し角力谷風といふ大敵と出合やうニ成しは又珍らしき事也此日疊札百四十八文後ニ至り場無之棧敷わり一人前二朱より壹歩迄せしは古今覺ざる事也

初日（小野川／所緣山）　二日目（小野川／御所車）　三日目（小野川／出羽海）

四日目（小野川／高崎）　五日目（小野川／宮城野　わけ）　六日目（小野川／武藏野）

七日目（小野川／谷風　ゑバらく組合突出し）　八日目（小野川／外ケ濱）　九日目（小野川／荒海）

當角力中餘り度々雨の降ければ或人勸進元竹繩半右衞門門口ニ落首を張ける尤竹繩家業風呂屋成けれハ

けふもふろあすもふろやの半右衞門跡に殘るはむしろ竹繩

〔編者曰ク原本此ノ所五行空白〕

一　九月　立役名人中山文七一世一代名殘狂言

角の芝居藤川山吾座にて勤ム

九月九日より十月二日マテ

（物艸太郎　物艸
（福在原景圖　蘭平

十月六日より十一月二日マテ

（けいせい轉多織（博）　島ノ小平次
（紅葉一世壽　平惟茂

右狂言古今希有の大入大當り日數五十一日の閒興行　棧敷賣高　一萬千九百廿九軒

中山由男一代狂言錄云　文七は故中山新九郎一蝶子にて實は松屋來助といふ狂言作者の子を養ふ幼名與三郎といふ元文二巳とし大坂子役にて妹脊の舞扇におつうの役懷にだかれて出られしが初ぶたい延享元子年より色子の部同四卯年市川龍藏座にて若女形と成り寬延元辰年京嵐座へのぼり角前髮にて中山文七と改メ同四未年都座にて元服なし寶曆五亥年大坂大西の初座本を勤メ　年來の藝評長文ゆへ略ス　今年は大坂も中の芝居は休ミ角も不繁昌にて有かなしのやうにめいりし所へ九月九日より一世一代狂言の看板出しかバ京大坂はいふに不及近國他國鳴り渡りての評判見事な摺物が出るやら盃を配るやら前狂言は物艸太郎大切は蘭平にて初日から崩るゝ斗りの大入日に增シ夜にましての大評判蘭平ハ每度の事ながら一入手に入たる大出來にてとかう申に不及物艸

の二の口姿いやしく心雲上なる仕こなし屋形物がたりなどは皮肉のはれた事三の口のめつたぜりふ山下金作スケとして出勤かづらきの役両人共に拍子有てそゝらず三の切の上使やく圍ひの内にて姿をかへ千の利休と名のる姿の古びいかにも大徳寺に姿を残せし木像といふ所あり切の愁ひ金作と二人無言の仕内譽るに詞足らず大切の蘭平大丈夫の仕様外に眞似するものなし後日狂言轉(ママ)多織に小平次やく我弟に異見の段また尋常ならぬ所が有て見るに胸ふさがるゝ雷場の立入大切の雀おどり最早箇様の姿は見る事あたわず先物艸ゝ作りあほう利休に成ての向上體のもうたん蘭平は大丈夫のむほんがゝりもぎたうなる似セ物狂ひ小平治は世話事の實儀藝扨惟茂の所作の雲上なる濡事の和らかさはけしき立入に二挺つゞミの手に入たる武道の忠臣所作もうたんやつし道外男作時代の向上世話事の仕内まで夫々に別れたる縦横(ヅウワウ)自在妓家の一大家天然の上手といはむに憚有べからず凡かぶきあやつりにて一世一代と申事實永五年子十月京榊山芝居にて坂田藤十郎一世一代と看板を出セしは藤屋伊左衛門の藝の一世一代なりし延享三寅年大坂市山助五郎座にて榊山小四郎釣舟三ぶ一世一代と申て五六日勤めて休たり又豊竹越前一世一代の女鉢の木延享二年丑の十一月より出し大入なれバ又なき事にもてはやせしも聲がらも老年に及びしゆへ人の惜む心も薄かりし實暦七丑の年豊竹筑前一世一代簇揃をかたりしも格別の評なかりし安永五申五月大坂中の芝居にて嵐小六一世一代山姥の狂言勤めたれ共日數少しの間也同未の年豊竹島太夫一世一代を勤しも所々にてかたりしゆへ何角と人の噂もありし同京にて加太夫ぶしの大和も一世一代をかたれ共久しい物といひふらしける明和九年辰九月故中山新九郎一世一代大入にて名殘狂言の親玉ならんと思ひしが此度のやうなるは昔も今も雙びなしいか様仕内も男ぶりも今を盛んに人の